

鳥取県米子市

YONAGO JO-SEKI

米子城跡

第33次・36次調査



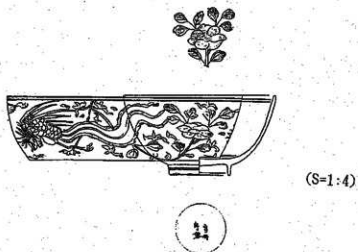
2002. 3

財団法人 米子市教育文化事業団

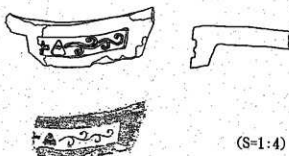
訂正資料

以下の2点の資料を訂正、追加します。

○15頁 第12図-1を以下の図面に訂正します。



○22頁 第18図-7に以下の瓦を追加します。



# 序

米子城跡は、戦国時代には伯耆国の戦略拠点として重要な役割を果たし、また江戸時代には、米子地域の政治・経済の中心として大きな役割を担ってきました。そして現在でも米子市のシンボルとして多くの市民に親しまれています。

当事業団では、この度、集合住宅の建設に伴い、米子城跡の発掘調査を実施いたしました。本書はこの成果の報告書であります。本書が今後の調査研究、教育のために広く活用され、埋蔵文化財の理解と関心を深めていただく一助となれば幸いです。調査に際し、多大なご理解とご協力いただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成14年3月31日

財団法人 米子市教育文化事業団  
理事長 森田 隆 朝

# 例 言

1. 本書は、株式会社マリモが計画した集合住宅建設工事に伴い、平成13年度に米子市西町、同中町で株式会社マリモの委託を受けて財団法人米子市教育文化事業団が実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書第1図は、鳥取県立博物館所蔵「鳥取藩土紋所持槍書上」中の荒尾義太夫部分を転載したものである。
3. 本報告書第2図の地形図は、昭和63年10月修正米子境港都市計画図(米子市)を縮小して使用した。
4. 本書に使用した方位、座標値は国土座標第V系の座標値である。またレベルは海拔標高を示す。
5. 基準点測量は、日本区画、ヨナゴ技研コンサルタントに、自然科学分析は、文化財調査コンサルタントに委託した。
6. 発掘調査によって作成された記録及び出土遺物は、米子市教育委員会が保管している。
7. 発掘調査は、財団法人米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 調査員 佐伯純也が担当した。
8. 現地調査及び報告書作成には多くの方々のご指導、ご協力をいただいた。明記して感謝いたします。(敬称略)

井上智博 大川泰広 国田俊雄 坂本敬司 下江健太 辻 信広 中川 寧 中森 祥 西尾克己  
乗岡 実 濱 隆造 舟木 聡 村上 勇 渡辺 誠 渡邊正巳  
山陰歴史館 鳥取県立博物館 米子市史編纂事務局



本書の執筆にあたって以下の資料を参照した。

1. 田中景彦 「米子みやげ」 1903年
2. 米子市 「米子市史」 1942年
3. 神奈川県立埋蔵文化財センター 「宮ヶ瀬遺跡群Ⅲ」 1993年
4. 東京都埋蔵文化財センター 「汐留遺跡Ⅱ」 2000年
5. 鳥根県教育委員会 「御崎谷遺跡・大床遺跡」 2001年
6. (財)米子市教育文化事業団 「米子城跡3遺跡」 1995年
7. (財)鳥取県教育文化財団 「米子城跡21遺跡」 1998年
8. 米子市教育委員会 「米子市内遺跡発掘調査報告書」 1998年
9. 米子市教育委員会 「久米第一遺跡」 1989年

## 目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 歴史的環境と調査地	2
第1節 米子城跡の歴史的環境	2
第2節 第33次調査地点	2
第3節 第36次調査地点	2
第3章 米子城跡第33次調査の概要	4
第1節 調査の方法	4
第2節 調査地内の堆積	4
第3節 弥生時代から古代の調査	6
第4節 近世の調査	8
第5節 近代の調査	18
第6節 米子城跡第33次発掘調査に係る自然科学分析	27
第4章 米子城跡第36次調査の概要	32
第1節 調査の方法	32
第2節 調査地内の堆積	33
第3節 弥生時代の調査	34
第4節 中世から近世前期の調査	36
第5節 近世後期の調査	41
第6節 近世末期から明治前期の調査	43
第7節 明治後期の調査	45
第8節 明治後期以降の調査	47
第9節 出土遺物	48
第5章 まとめ	53
第1節 米子城跡第33次調査	55
第2節 米子城跡第36次調査	59

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

本調査は、株式会社マリモによって計画された、集合住宅建設工事に伴う米子城跡第33次・36次発掘調査である。

米子城跡第33次調査は、株式会社マリモが米子市西町地内において集合住宅の建設を計画し、平成13年5月に米子市教育委員会に、当該地の埋蔵文化財の有無について照会した。予定地は、米子城跡外郭内に位置しており、近世に描かれた絵図との比較から、武家屋敷が存在することや、周辺の調査で弥生時代の集落遺跡の存在が明らかであることから、米子市教育委員会が事前の試掘調査を実施した。調査の結果、工事予定地内における埋蔵文化財の存在が確認されたため、株式会社マリモと米子市教育委員会が協議した結果、開発面積のうち、駐車場、植栽部分については、現状を変えないこととし、調査範囲から除外した。基礎工事部分については、全面調査することとなり、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。これにより、財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施することとなった。

米子城跡第36次調査は、株式会社マリモが米子市中町地内において集合住宅の建設を計画し、平成13年12月に米子市教育委員会に、当該地の埋蔵文化財の有無について照会した。予定地は、米子城跡外郭の外堀沿いに位置しており、平成10年度に米子市教育委員会が実施した試掘調査によって、中世の集落遺跡の存在が確認されていた。株式会社マリモと米子市教育委員会が協議した結果、開発面積のうち、地下駐車場及び建物工事部分について、全面調査を実施することとなり、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。これにより、財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査の経過

第33次調査は、現地調査を平成13年6月より着手し、平成13年9月末日に終了した。礎石建物跡の検出に際して、平成13年9月9日に現地説明会を開催し、一般市民を対象に遺跡の概要を説明した。

第36次調査は、現地調査を平成14年1月より着手し、平成14年2月末日までに終了した。現地調査終了後は、整理作業を進め、平成13年度末日までに報告書を刊行した。

## 第2章 歴史的環境と調査地点

### 第1節 米子城跡の歴史的環境

米子城は、鳥取県米子市に所在する城郭遺跡である。城跡は、出雲・伯耆両国の国境付近に位置しており、15世紀中ごろに伯耆国守護代山名氏の防衛線としての役割を担う城として築城されたのが始まりとされる。天正19年(1591年)には、東出雲・隠岐・西伯耆12万石の領主として吉川広家が入府し、米子城を居城と定めたことから本格的な城造りが始められた。慶長5年(1600年)には伯耆18万石の領主として中村一忠が築城や都市計画を引き継ぎ、慶長7年(1602年)に完成させた。慶長15年(1610年)には、伯耆国公見・汗入郡6万石の領主として加藤貞泰が、元和3年(1617年)には、池田由之が米子城預かり(3万2千石)として入城した。寛永9年(1632年)からは池田家の家老荒尾氏が米子城預かり(1万5千石)となり、以後明治2年(1869年)まで荒尾氏の統治が続いた。明治維新後には、郭内の武家屋敷の多くが破却され、水田へと変貌していった。その後は、戦中、戦後を経て米子城跡の内郭、外郭では役所などの公的な機関や病院、住宅などが密集する都市へと変化し、往時の景観を留める地点は少なくなっている。

### 第2節 第33次調査地点(第2図-A)

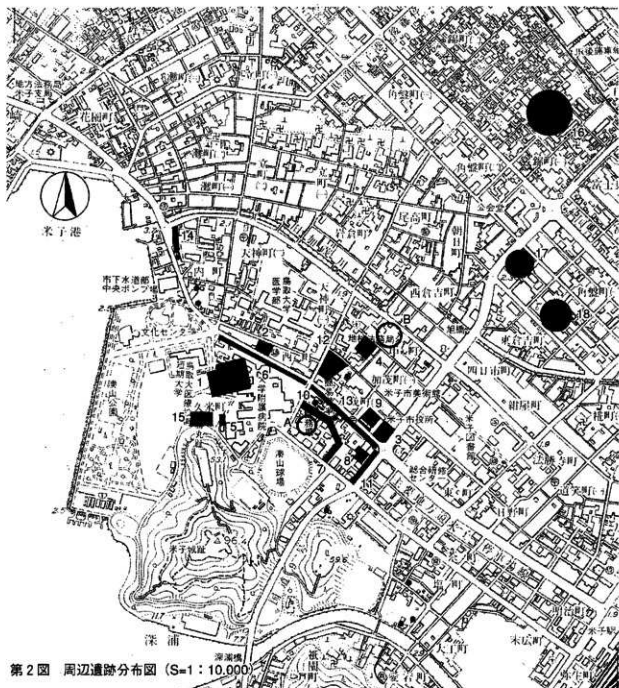
第33次調査地点は、絵図が存在しない17世紀代の状況は不明であるが、内堀に面した一等地であり、吉川氏、中村氏時代には、重臣の屋敷が存在したものと考えられる。宝永6年(1709年)の絵図では、荒尾儀太夫の屋敷となっている。また明治時代にこの地点を撮影した写真が「米子市史」の巻頭に掲載されており、これを見ると、瓦葺の建物とそれを取り囲む塀と門があったことがわかる。

### 第3節 第36次調査地点(第2図-B)

第36次調査地点は、荒尾氏時代には、五十人鉄砲町と呼ばれた地区の北側に当たり、絵図には屋敷などの施設が描かれていない地点である。大正時代の地籍図では、水田、畑があり、宅地へと地目を改められた痕跡も読み取れる。平成10年度に米子市教育委員会によって実施された試掘調査(米子城跡第23次調査)では、上錘、土鍋が出土しており、近世以前に遡る遺跡の存在が指摘されている。



第1図 荒尾儀太夫家家紋



第2図 周辺遺跡分布図 (S=1:10,000)

遺跡名

- |              |              |              |
|--------------|--------------|--------------|
| A・米子城跡33次調査  | B・米子城跡36次調査  | 1・米子城跡1次調査   |
| 2・米子城跡2次調査   | 3・米子城跡3次調査   | 4・米子城跡4次調査   |
| 5・米子城跡5次調査   | 6・米子城跡6次調査   | 7・米子城跡7次調査   |
| 8・米子城跡8次調査   | 9・米子城跡9次調査   | 10・米子城跡21次調査 |
| 11・米子城跡22次調査 | 12・米子城跡25次調査 | 13・米子城跡27次調査 |
| 14・米子城跡29次調査 | 15・久米第一遺跡    | 16・鏡町第1遺跡    |
| 17・角盤町遺跡     | 18・四日市町遺跡    |              |

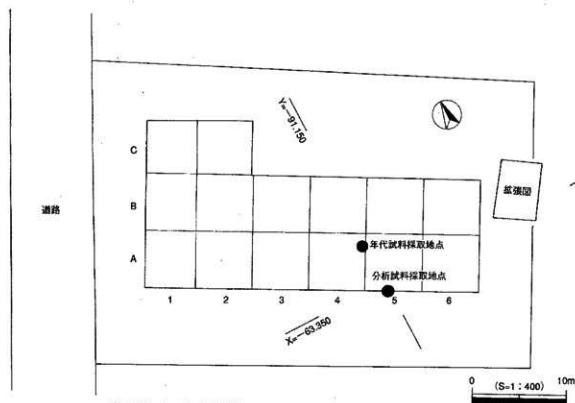
### 第3章 米子城跡第33次調査の概要

#### 第1節 調査の方法

発掘調査は、重機にて調査区の表土を掘削した後、人力にて掘り下げ、順次、遺構検出、測量、写真撮影などの記録作業を行った。調査区は、正方形の6メートルグリッドを14区画設定し、出土した遺物の取り上げは、グリッド単位で行った。また排土置場の関係から1-2区、5-6区、3-4区の順に調査を行った。また拡張区を設定し、屋敷を区画する溝状遺構の存在を確認した。

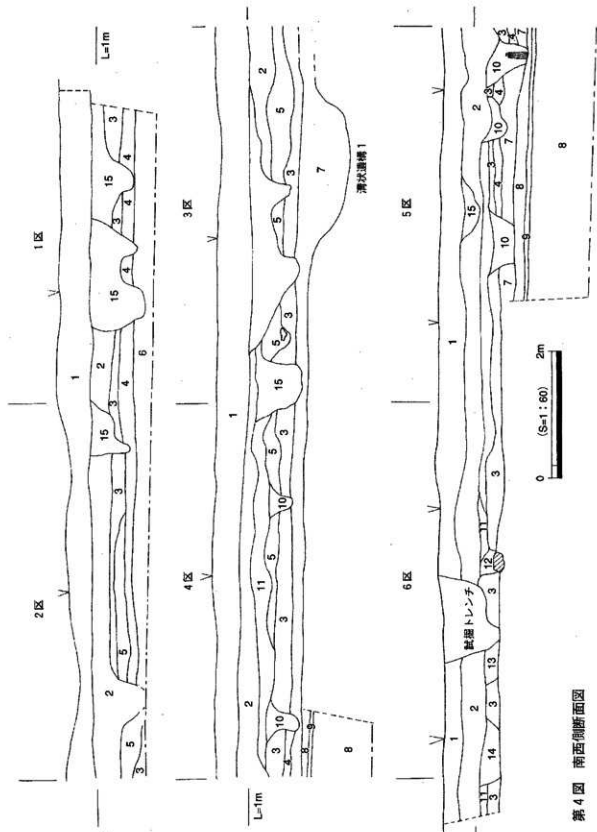
#### 第2節 調査地内の堆積（第4図）

調査区は、現在まで宅地として利用されていた。調査区内には上層より、盛土（1層）、暗茶色砂質土（2層）、灰色砂質土（3層）、黒色粘土（4層）、黒褐色砂質土（5層）、暗灰色粘土（7層）、白茶色粗砂（8層）が堆積している。また白色粗砂層中には、黒灰色粘土（9層）の水平堆積があり、その層中に含まれていた木片の放射性炭素年代測定では、 $2280 \pm 120y$ の年代値が得られている（本章、第6節を参照）。遺構を検出したのは、暗茶色砂質土上面で近代のものを、灰色砂質土、黒色粘土層の上面で近世のものを、白茶色粗砂層の上面で弥生時代の溝状遺構を検出した。また近世の遺構を検出した灰色砂質土、黒色粘土、黒褐色砂質土は、所々マール状に土層が堆積している部分があり、近世の遺構を形成するにあたって持ち込まれた整地土層と考えられる。



第3図 トレンチ配置図





土層名

- 1・凝土
- 2・黒茶色砂質土
- 3・細砂混じり灰色砂質土
- 4・黒色粘土
- 5・黒色砂質土
- 6・黒色砂
- 7・黒色粘板土
- 8・白色粘砂
- 9・灰色粘板土
- 10・灰色ブロック混じり
- 11・黒茶色砂質土
- 12・赤褐色粘土
- 13・白色砂質土
- 14・黒色砂質土
- 15・砂

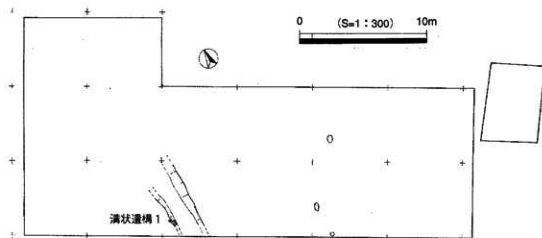
第4図 南西側断面図

### 第3節 弥生時代から古代の調査

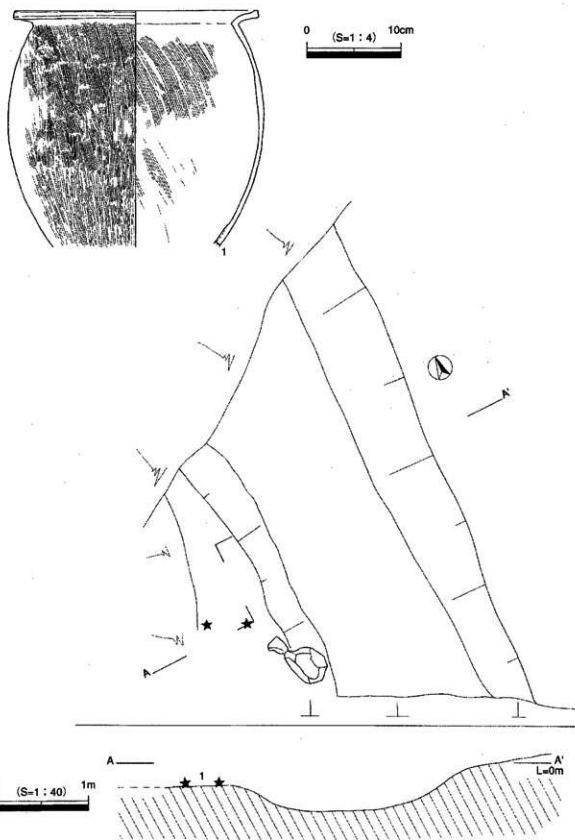
弥生時代の遺構は、3-Aグリッドの白茶色粗砂層上面にて溝状の遺構を検出した。また遺構は検出できなかったが、暗灰色粘土層において、古墳時代から奈良・平安期にかけての遺物が少量出土している。これらの遺物は、細片化したものが多いことから、暗灰色粘土層を耕作土として利用されていた際に混入した可能性が考えられる。

#### 溝状遺構1（第6図）

3-Aグリッドにおいて検出した溝状の遺構である。白色粗砂の堆積層に掘り込まれており、検出した長さ約5m、幅2.2m、深さ0.4mで、断面は緩やかなU字形を呈する。人為的な遺構か、自然河川かどうかは判断出来なかった。また南西岸部に一抱えほどの礫があり、それに近接して弥生土器（第6図-1）が出土した。遺構内は、暗褐色の粘土がラミナ状に堆積しており、止水状態に近い状態で埋没していた状況が窺える。出土遺物は、甕（第6図-1）である。口径は26cm、胴部最大径が27cm、残存高は25cmの甕形土器で、胴部の最大径が口径を若干凌駕する。口縁部はナデ調整され、端部はやや肥厚する。調整は内外面とも刷毛目調整で、外面下半部はミガキ調整を施す。また内面下半部に炭化物が付着している。この遺構の埋没年代は、出土遺物から弥生時代中期中葉と思われる。



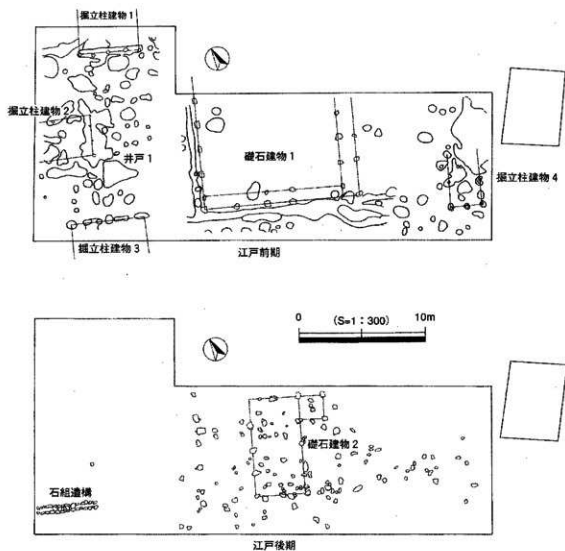
第5図 検出遺構図（弥生時代）



第6図 溝状遺構1 平・断面、出土遺物図

#### 第4節 近世の調査

近世の遺構は礎石建物跡、掘立柱建物跡、石組井戸、石組遺構などを検出した。遺構は、黒色粘土層上にある褐色の砂や砂質土の上に形成されている。この褐色土中からの遺物の出土は少なく、礎石建物1を建てるための盛土と考えられる。遺構の時期は、黒色粘土層出土遺物の下限が、15世紀から16世紀末に相当することから、それ以降、17世紀初頭頃の造作と考えられる。掘立柱建物群についても、礎石建物1と方位が一致することから、同時期に併存していたものと考えた。また礎石建物2については、建物の一部が礎石建物1と重複していることと、礎石建物1の上層埋土から陶胎染付などが出土していることから、18世紀代には建物が建替えられていたものと考えられる。



第7図 検出遺構図 (江戸前期・後期)

(1) 近世前期 近世前期の遺構は、礎石建物、掘立柱建物、井戸を検出した。

#### 礎石建物 1 (第 8 図)

調査区の中央部で検出した、推定 5 間×4 間の礎石建物である。また北側の調査区外に伸びている可能性もある。南側と東側に庇を持つもので、1 間は約 2 m あり、底部も 1~1.2 m ある。また建物の北側と東側には、幅 60cm、深さ 10cm 程度の雨落状の溝が見られた。礎石は概ね一辺が 50cm 程度の扁平な石を用いている。最大の礎石は、西南角に置かれたもので、一辺が 60cm あった。また五輪塔の地輪を使用している礎石 (第 8 図-礎石 1) も見られた。礎石の設置方法については、明確な堀形を検出できなかったため、整地土の上に直接据えたものと考えられる。この建物の時期は、礎石の下から志乃の向付や青花片が出土しており、16 世紀後半以降に建てられたものと考えられる。

#### 掘立柱建物 1 (第 9 図)

検出した長さ 5 m の土坑である。幅 60cm、深さ 40cm で、2.3 m 間隔で 3 本の柱材が石の上に立てられていた。この遺構は、一辺のみの検出であるが、形態的な特徴から、布堀りの掘立柱建物と見られる。遺構内からの遺物の出土は無かった。

#### 掘立柱建物 2 (第 9 図)

1-B 区で検出した掘立柱建物である。不整形に掘り込まれた土坑内に 5 本分の柱材が遺存しており、これらの状況から、一つの建物として理解した。柱間は東西方向に 1 間分、約 3 m を確認でき、南北方向にも 3 間 3.1 m (1 間分は 0.8~1.2 m) が想定できる。なお南北方向の柱筋のみ根石を用いていること、柱材の太さに違いが見られることなどから、建物として復原するにはやや疑問が残る。

#### 掘立柱建物 3 (第 10 図)

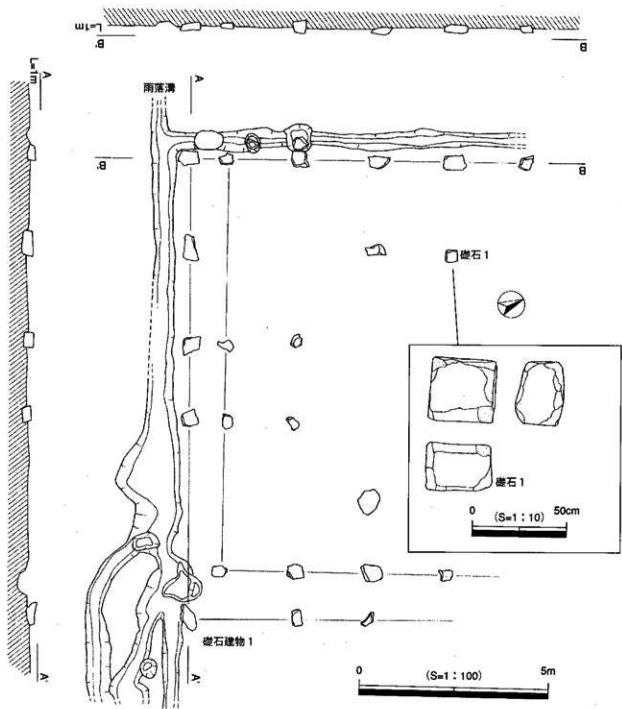
6 基のピットが直線に並ぶ遺構で、一辺のみの検出であるが、4 間ほどの掘立柱建物と推測される遺構である。出土遺物が無く、時期が特定できないが、柱筋が礎石建物 1 や、その他の掘立柱建物と一致することから、同時期に建てられた可能性が高いものと考えられる。

#### 掘立柱建物 4 (第 10 図)

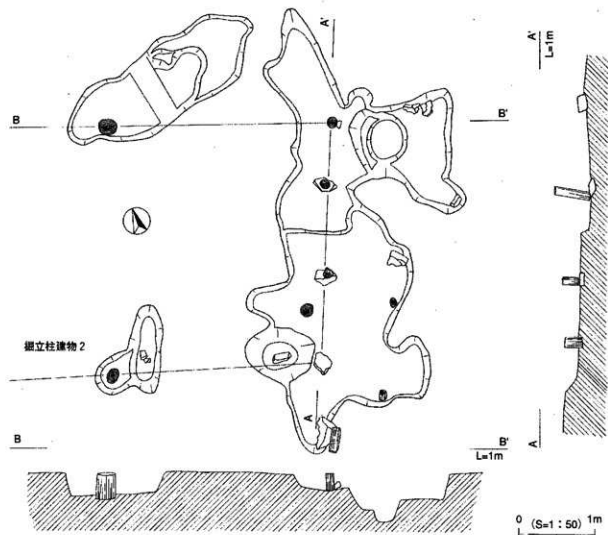
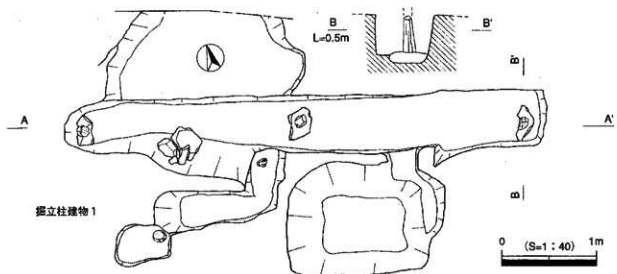
調査区南東部で検出した 2 間×2 間の根石を持つ建物である。1 間の距離は、東西方向が 0.8 m、南北方向が 2.1 m である。出土遺物は無く時期は不明。

#### 井戸 (第 10 図)

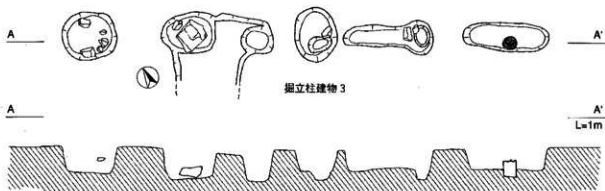
2-A グリッドで検出した石組の井戸である。掘り方は不整形であるが、直径 2 m 程度、深さ 1.3 m で、石組の内法は上部が直径 1 m と大きい。石材は 10cm から 30cm 程度の角礫を使用している。出土遺物は極めて少ないが、埋土中から備前焼の甕と見られる小片が出土しており、13 世紀以降に作られたものと考えられる。また肥前産の磁器製品が全く出土していないことから、17 世紀前半には埋没していたものと考えられる。



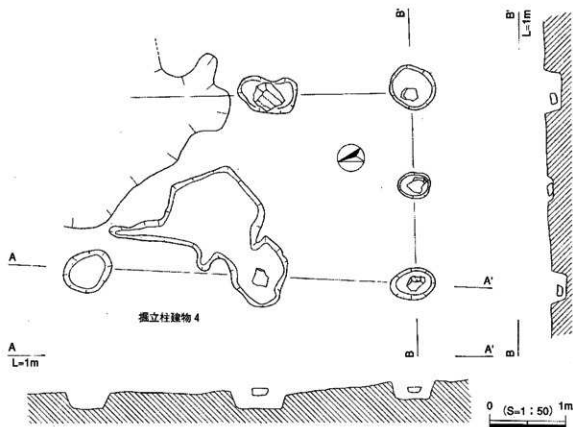
第 8 図 礎石建物 1 平・断面図



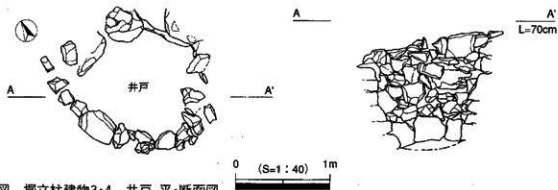
第9図 独立柱建物1・2 平・断面図



掘立柱建物 3



掘立柱建物 4



第10図 掘立柱建物3・4 井戸、平・断面図



(2) 近世後期 近世後期の遺構は、礎石建物、石組遺構を検出した。

### 礎石建物 2 (第 11 図)

礎石建物 1 と重複して検出された礎石建物である。建物の規模は、4 間×2 間で南東側に張り出しを持つ。1 間の距離は 2 m で、下層で検出した礎石建物 1 と同じである。また張り出しの礎石には、五輪塔 (第 11 図・礎石 2) が使われている。建物の主軸が、礎石建物 1 とほぼ一致することや柱間距離が同じであることから、礎石建物 1 の廃絶後、それほど期間を経ずに建て直されたものと考えられる。時期は、礎石の検出作業中に陶胎染付などが多く出土しており、18 世紀以降に立てられたものと考えられる。

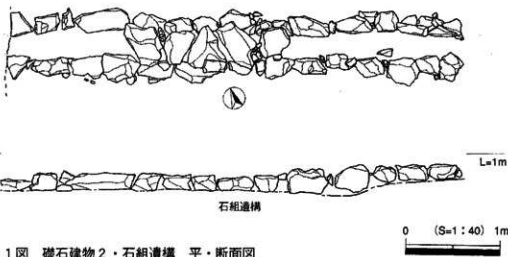
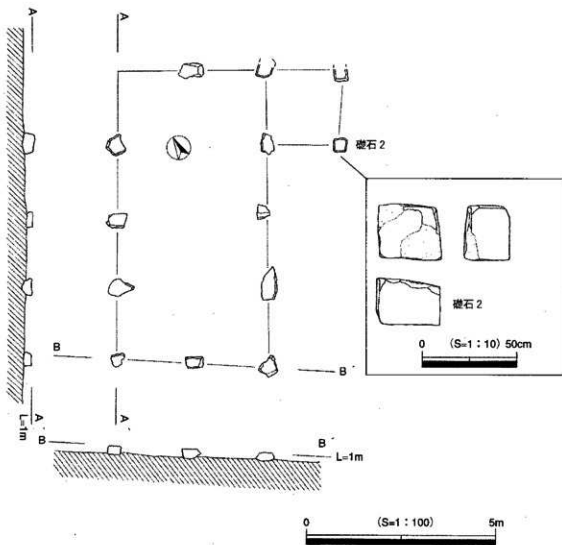
### 石組遺構 (第 11 図)

全長 4.8 m、幅 70 cm、内法は、幅 20 cm、高さ 20 cm の暗渠状の石組遺構である。石材には角礫を用い、一部には、石蓋が残っている。道路に近い位置に作られていることから、門に関係する遺構であろうか。遺物が出土していないため時期を明らかにすることが出来ないが、この遺構のすぐ上層に明治時代以降のものと思われる土管が作られており、幕末頃までは、暗渠として機能していた可能性が考えられる。

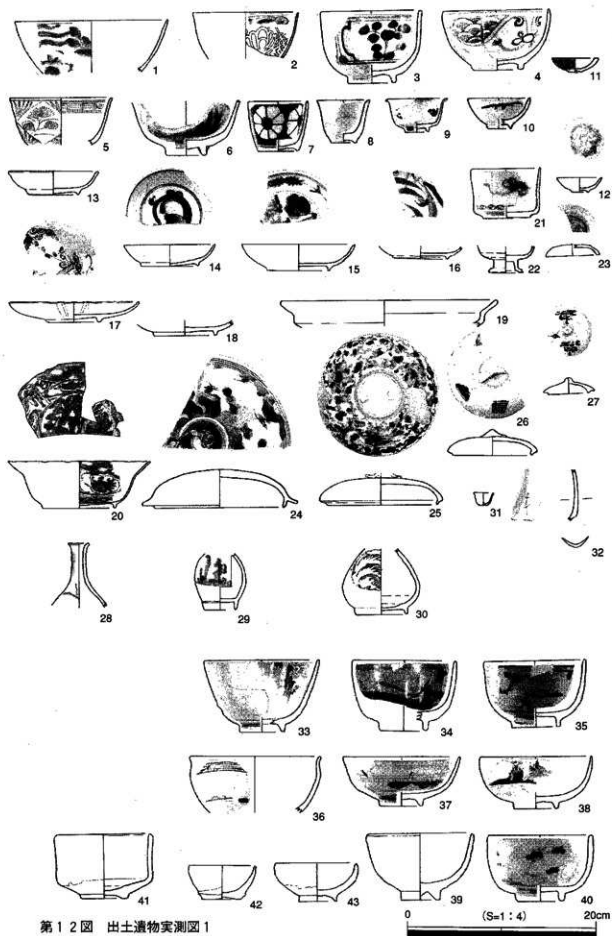
### 出土遺物 (第 12 図～第 14 図)

出土した遺物は、磁器、陶器、土器、金属製品、木製品、ガラス製品などがある。

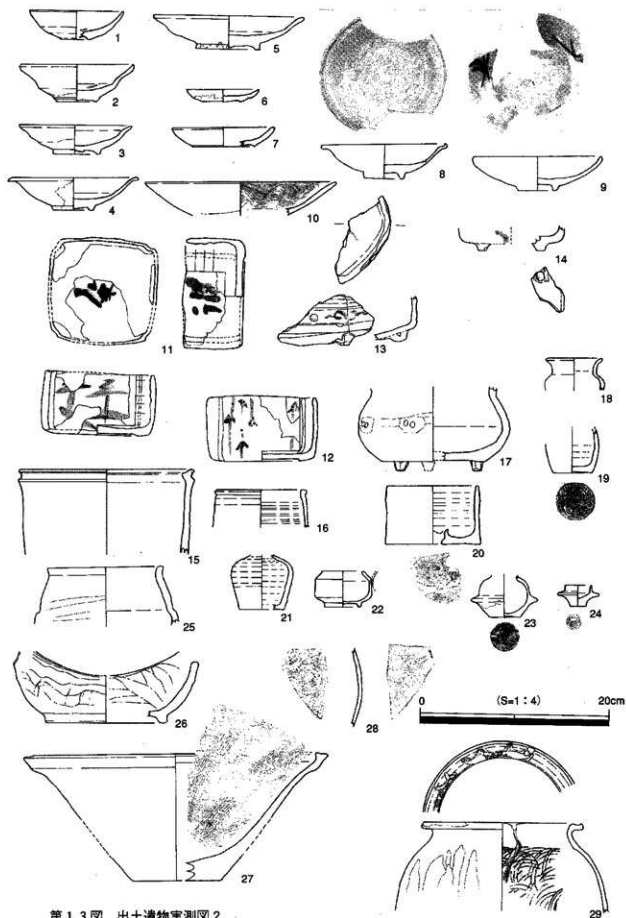
第 12 図は、磁器製品である。6 は浦富焼 (うらどめやき) の碗である。13～18、23 は青花で、16 は底部高台内無軸である。23 は鉢で、胎土はやや光沢があり、極めて薄い。口縁には、いわゆるモンスターマスクの図柄が描かれている。31 はミニチュアの碗、32 は、折れ松葉の文様を描く散蓮華である。33～38 は、陶胎染付の碗である。今回の調査では、陶胎染付が多く出土している。第 13 図は、陶器製品である。1 は灰色を呈し、底部は笥節高台、内面には目跡が残る。25 は唐津、6 は瀬戸美濃。11～14 は志乃の向付である。15～20 は備前製品で、21～26 は産地不明の製品。27 は肥前産すり鉢。28、29 も肥前産の壺と見られる。第 14 図 1～9 は、土師器皿である。手づくねのものや底部糸切りのものがある。10 は耳皿。11、12 は、焼塩壺である。11 は、口径 4.4 cm、高さ 5.4 cm の手づくね整形で、口縁を強くナダる。色調はピンク色を呈する。12 は、口径 6.7 cm、高さ 6.1 cm、口縁が外反する筒形の容器で、底部は糸切る。15 は、ダニエル電池の容器で、外面に「み」と刻印されている。18 は須恵器坏蓋である。19 は、格子目タタキの須恵器壺片。20～24 は弥生土器である。弥生中期中葉に属するものと考えられる。25 は青銅製の蓋である。26 は鉄製の刀子。27 は青銅製の弁である。27 は、ほぼ完存しており、一部に金メッキと文様が見られる。木製品、29 は櫛、30 は木釘、31 は鞘状に加工されている。32、33 は漆塗りの碗で、高台の高いものである。34 はガラス製のかんざし片、35 は、盛土中から出土したもので、キセルの吸口と見られる。完形品のため、断面が観察できないが、ガラス製と見られる。36 は、乳白色のガラス容器である。底面に「平尾商店」と書かれている。34～36 は、近世以降のものと考えられる。



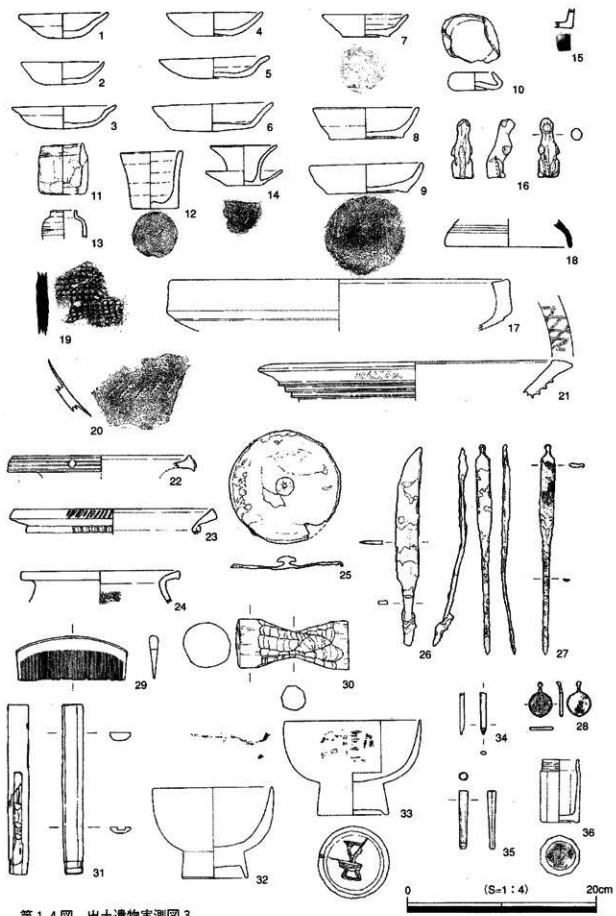
第 11 図 礎石建物 2・石組遺構 平・断面図



第12图 出土遺物実測図1



第 13 图 出土遺物実測図 2



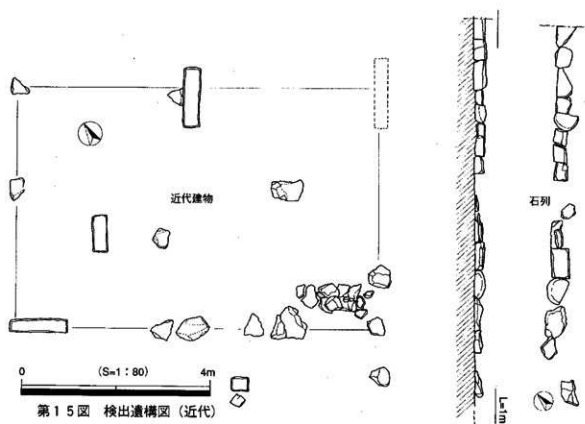
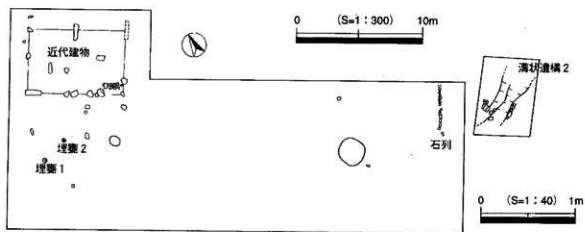
第14图 出土遺物実測図3

## 第5節 近代の調査

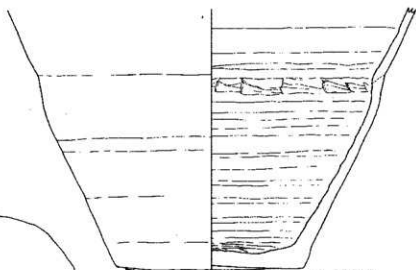
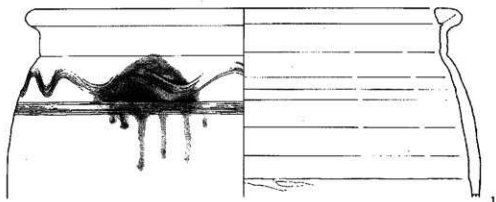
近代の遺構は、建物跡、井戸、水路跡、埋壙などを検出した。また出土遺物は、拡張区で検出した水路跡から明治後半期のものと思われるものが多量に出土した。

### 近代建物（第15図）

盛土層の直下に検出したものである。長方形の石が土地の地割と並行して並んでおり、その範囲の下層には、不整形の大石が置かれている。恐らく建物の根固め石として置かれたものと見られる。建物の規模は、東西7.8m、南北5mである。長方形の石材は、鳥根県安来市に産出する荒島石を用いている。



第15図 検出遺構図（近代）

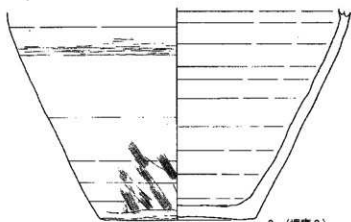


2 (埋壺1)



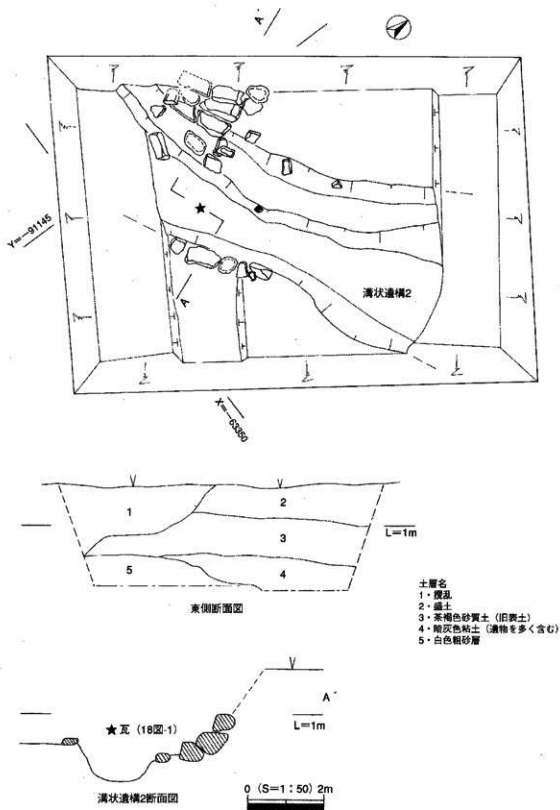
1 (埋壺1) 底部

0 (S=1:4) 10cm



3 (埋壺2)

第16圖 埋壺1・2



第17図 拡張区 平・断面図



## 埋甕 (第16図)

1—B区において2基並んで検出した石見焼の甕である。埋甕1の底部外面には墨書があり、記載内容から、甕の中に小形の製品を詰めて運搬した際の記録と思われる。同様のものは鳥根県御崎谷遺跡に類似がある。埋甕1、2とも内面には灰色の付着物があり、便溺か肥溜めとして利用されていたものと考えられる。

## 石列 (第15図)

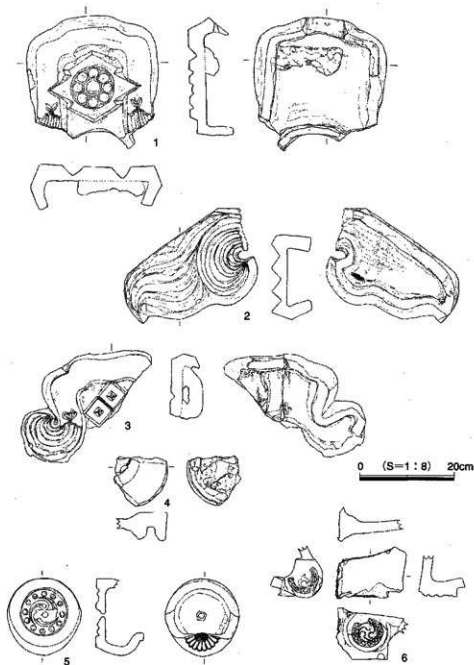
角のとれた長方形の石材を並べたもので、検出した長さ4mである。建物や塀の基礎として使われたものと思われる。

## 溝状遺構2 (第17図)

拡張区において検出された水路状の遺構である。検出した長さは約5m、幅1.5m、深さ50cmで、西側には水路に向かって石段が作られている。この地点からは、多量の遺物が出土した。

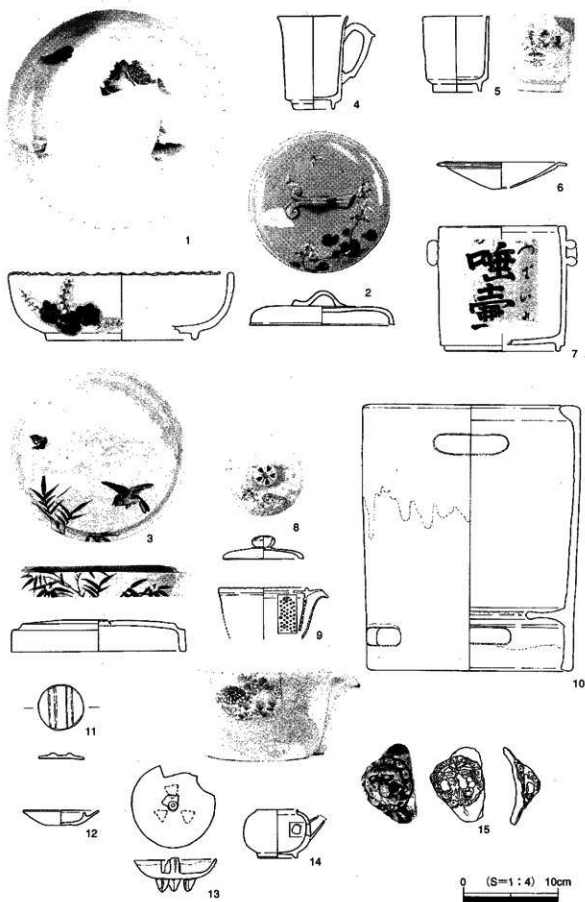
## 溝状遺構2出土遺物 (第18図～第22図)

第18図は瓦である。1と2は、鬼瓦(横止瓦)で、同一個体と見られる。1は、高さ28cm、幅28cmで、箱造りによって整形されている。正面には、荒尾義太夫家の家紋が彫込まれている。また表面には鉄分が付着している。3も同じく鬼瓦である。正面には、家紋を彫り、表面には取手状の接合部が取り付けられている。4も鬼瓦の破片か。5は、左回りの巴紋に12個の珠紋が巡る。正面中央には焼成後に開けられた穴があり、軒(垂木)先瓦として利用されていたものと考えられる。第19図1～14は、京焼風の陶器で、鳥根県松江市の布志名焼(ふじなやき)系の製品と見られる。1、2、3、8、9は精緻な絵が描かれている。4は、取手付きのカップである。5は湯呑みで「松江三景」の文字と絵が金彩されている。絵は、松江城、嫁ヶ島、大山を表しているものか。7は「唾壺」で、6の漏斗とセットになる。11は蓋、12は灯明皿受け皿、13は燭台、14は醤油注しである。これらの布志名焼系の製品は鳥根県伯太町の母里焼(もりやき)などでも生産されており、特定の産地については、いまだ断定できる状況にはない。15は、獣面をかたどった陶器製品で火鉢か。ここに取手が付くものと思われる。米子城跡29次調査でも同様のものが出土しており、鳥根県の石見焼や、瀬戸の製品に類似品がある。第20図1、2はこね鉢である。色調は乳白色を呈し、内面に焼台の痕跡が残る。鳥根県西部の石見焼(いわみやき)系の製品か。3～6は土瓶である。3、4は陶器製で、蓋とセットになる。外面には茶褐色の釉に白と青で絵を描く。5、6は磁器で、同型品が鳥根県の御崎谷遺跡から出土している。7～16は、光沢のある胎土の製品で、瀬戸の新製焼と思われる。7～9は合子で、内面に朱の付着するものがある。紅皿、もしくは朱肉入れか。10は、磁器製の人形で、軍人が馬に乗っているものである。右手の部分に穴が開けられており、ここに旗を挿したのか。11は、ミルクポット形の容器。12～14は、醤油注し、16は洋食器を模倣した皿で、底部外面に銘がある。第21図2は、素焼きの楕円形瓶で、ダニエル電池の内瓶である。また、細片のため図化できなかったが、ダニエル電池の外瓶と見られる磁器の破片もいくつか出土している。3は、英国製靴磨き液の瓶と見られるもので、よく焼き締まった胎土に茶褐色の釉がかかる。神奈川県の長福寺址に同型品の出土例がある。6はボウル形の容器で、胎土は砂っぽい。骨灰陶器か。底部には向かい合う獅子とペガサスの意匠に「ROYAL IRON STONE CHINA JOHNSONBROS ENGLAND」の銘が印刷されている。7は、手づくねの灯明皿で内面には煤が付着している。12は木筒で、長さ21cm、幅6.8cm、厚さ1cmで上下に穴が開けられている。表面に「伯耆国米子行 久山義英」と墨書されている。このタイプの木筒は、ほぼ同形、同寸で、記載形式についても類似したものが、東京都港区の汐留遺跡からいくつか出土している。汐留遺跡が鉄道に

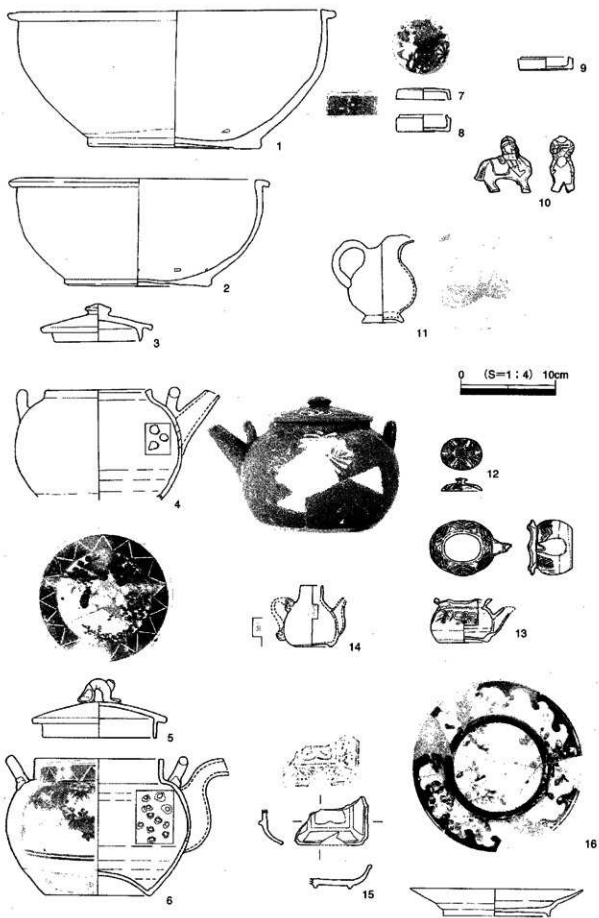


第18図 狐張区出土遺物1

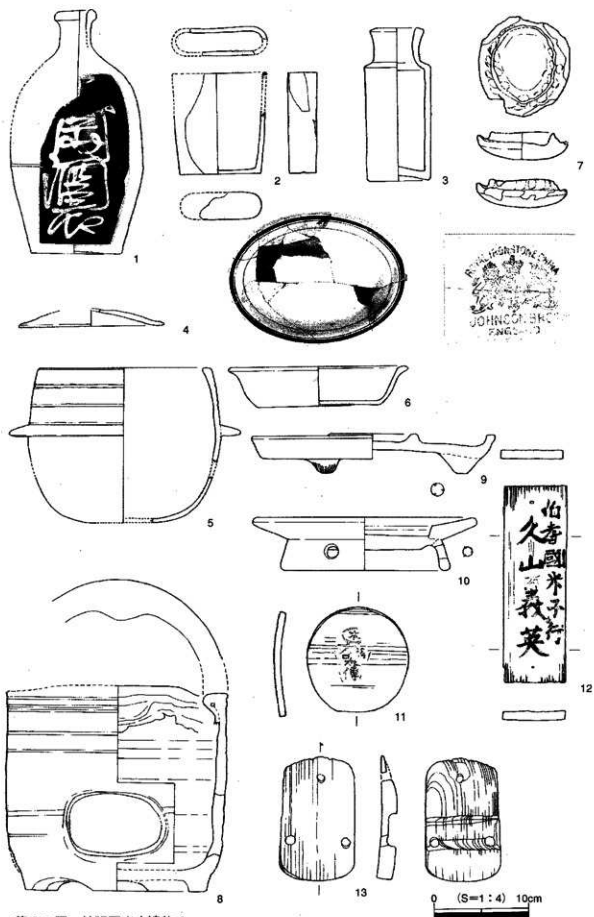
関連する遺跡であることから、鉄道貨物などに付けられた荷札の可能性が考えられる。第22図はガラス製品類、磁器の瓶蓋である。1、2は、王冠で栓をするタイプの瓶である。王冠式の瓶蓋は、明治30年代にアメリカで発明されたもので、日本での生産は、大正時代以降である。この瓶がアメリカ産かどうかはわからないものの、螺旋状に整形した痕跡を残す。7は、牛乳瓶である。内面にネジ穴を切り、外面に陽刻で「消毒 均質全乳」「弘乳舎」の文字が書かれている。弘乳舎は明治36年に出版された米子の地理案内書「米子みやげ」の巻末に広告が出ている。12は「BICYCLES BEST OIL ZISEYA JAPAN」銘の瓶である。米子での自転車の普及は、明治30年以降のことである。21は「CAW'S INK」銘のインク瓶である。同形品が久米第一遺跡（第2図-15）からも出土している。29は、ガラス製かんざしの破片である。24～28は、ガラス製の瓶蓋である。31、32は磁器製の瓶蓋で、跳ね上げ式のものである。30は、電灯の傘で、傘の軸部は粗く加工した跡が残り、端部は折り返している。



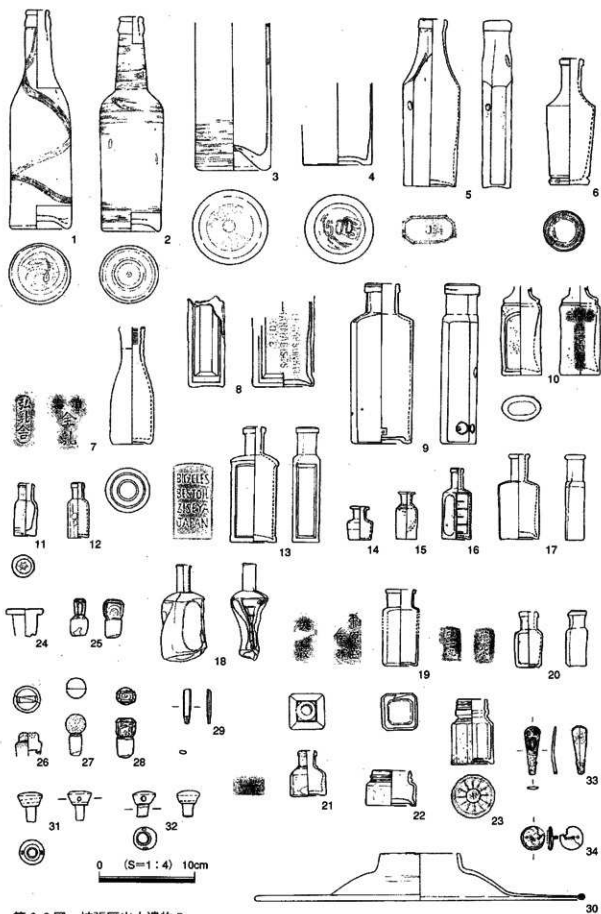
第19図 菰張区出土遺物2



第20図 拡張区出土遺物3



第21圖 擴張区出土遺物4



第 2 2 图 拔張区出土遺物 5

## 第6節 米子城跡第33次発掘調査に係る自然科学分析

渡辺 正 巳 (文化財調査コンサルタント(株))

### はじめに

米子城跡33次調査では、米子城跡北側の米子市西町地内を発掘調査している。

本報告は、財団法人米子市教育文化事業団が遺跡周辺の植生変遷、堆積環境変遷などの古環境変遷を推定するために、文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した調査報告書の概報である。

### 分析試料について

第3図に示す2地点において、分析試料を採取した。花粉分析他用試料採取地点の模式柱状図および採取層準を第23図の花粉ダイアグラムに示した。<sup>14</sup>C年代測定用試料は異なる地点で採取しているが、同模式柱状図中の同層準にして示している。

### 分析方法

花粉分析処理は渡辺(1995)に、プラント・オパール分析処理は藤原(1976)のグラスピース法にしたがっている。

全ての分析の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。プラント・オパール分析ではグラスピースが400個体以上になるまで検鏡を行い、同時に検出されるイネ科機動細胞起源のものに限って同定を行った。

また、<sup>14</sup>C年代測定は米国ベーター社に委託し、液体シンチレーション法により測定した。

### 分析結果

分析結果を第23図の花粉ダイアグラム、第24図のプラント・オパールダイアグラムに示す。

花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示している。

プラント・オパールダイアグラムでは、各分類群毎に検出数を1gあたりの含有数に換算し、スペクトルで示している。

### 花粉分帯

花粉分析結果では、上位の2試料からは充分な量の木本花粉が得られなかった。また、得られた木本花粉組成は従来から中海で得られている木本花粉組成(たとえば、渡辺ほか1990)、あるいは米子市内目久美遺跡(大西、1986)で得られている木本花粉組成と異なるものであった。このことから、上位2試料から得られた木本花粉組成は調査地点近辺の局地的な植生を示しているか、堆積時の物理的作用あるいは堆積後の化学的作用により選別・濃縮された可能性が指摘される。

一方、最下位の試料No. 3はこれらの分析結果と整合的であり、遺跡近辺から日野川水系の大山西部～中国山地にかけての植生を反映したものであることが明らかである。

以上のことから今回は地域花粉帯を設定せず、試料No. 2, 1層準での農耕および、試料No 3層準での遺跡周辺の古植生を主体に論ずることとする。

## 古環境変遷

ここでは、試料毎に遺跡周辺の古環境を推定する。また、歴史的变化(変遷)を見るために下位から上位に向かって示した。

### (1) 弥生時代前期以前

今回<sup>4</sup>C年代測定結果の得られた試料は、弥生時代以前に堆積したと考えられる白色粗砂層に挟まれた標高+20cmに位置する腐植質粘土であった。

白色粗砂層の堆積環境についての詳細な観察は成されていないが、河口域での堆積が推定され、腐植質粘土は河川の安定期に堆積したと考えられる。

したがって調査地点近辺は、<sup>4</sup>C年代の得られた2280±120y BP(2σ):弥生時代前期には白色粗粒砂が堆積するような河口域に位置していたと考えられる。その後、無堆積あるいは浸食作用を受けた後完全に陸化し、No.3層準を含む砂層が土壌化を受けながら堆積し、中世以降に開墾されたと考えられる。

### (2) 試料No.3層準(中世)

マツ属(複維管束亜属)花粉が卓越し、コナラ亜属花粉を伴うことから、遺跡背後の湊山(米子城山)や南に点在する小山(丘陵)にはアカマツ(クロマツの可能性もあり)にコナラ類が混在する二次林、中海沿いの海岸にはクロマツ(アカマツの可能性もあり)海岸林が分布していたと考えられる。また、アカガシ亜属花粉も僅かながら検出されることから、やや離れた除田、新山、大谷、宗像一带に広がる丘陵地帯には、アカマツ(クロマツの可能性もあり)にコナラ類が混在する二次林に加え、カシ類を要素とする照葉樹林が広がっていた可能性が指摘できる(ただし、アカガシ亜属が米子城山の二次林中に混在していた可能性も充分にある。)

またイネ科(40ミクロン以上)花粉が極めて高い出現率を示すことから、調査地点は水田であったと考えられる。このことは、イネに由来するプラント・オパールが多く検出できたことからも指示される。また、ソバ属花粉が検出されることから、裏作や休耕田を利用してソバが栽培されていたことは明らかである。一方、アブラナ科花粉の出現率がやや高いこと、藤田ほか(1991)の条件に合うことから、アブラナ(ナタネ)が栽培されていた可能性が指摘できる。

一方で、すべての試料でカヤツリグサ科、イネ科(40ミクロン未満)、ヨモギ属、タンポポ亜科などの「雑草」に由来する花粉化石が多産する。また、ガマ属などの水棲「雑草」も検出される。これらのことから、「水田は調査地点に有ったのではなく、調査地点に隣接する場所にあり、調査地点は氾濫原あるいは沼沢湿地であった。」「たがたび洪水に見舞われ耕作地が放棄されるもの、しばらく後に耕作が再開される。」などの可能性も指摘される。

### (3) 試料No.2層準(中世)

前述のようにコナラ亜属花粉が卓越し、既知の分析と異なる結果を得た。検出花粉の数量が少ないものの、このまま調査地点周辺の植生を示していると考えれば、湊山のアカマツ林がコナラ林へ変化、あるいは極めて近い場所にコナラ類の木々が生育していた可能性が指摘できる。

草本花粉組成はそのまま調査地点近辺の植生を示唆すると考えられる。イネ科(40ミクロン以上)花粉の出現率が極めて高く、イネに由来するプラント・オパールも多く検出されることから、調査地点で稲作が行われていた可能性が極めて高い。また、ソバ属花粉も検出され、裏作や休耕田を利用してソバが栽培されていたことが明らかである。

### (4) 試料No.1層準(江戸時代初頭)

試料No.2層準同様、既知の分析と異なる結果を得た。コナラ類が減少し、カシ類が増加することから、コナラ林が極相林であるカシ類を主要素とする照葉樹林に遷移していく過程を示す可能性



がある。ただし、前述のように木本花粉の検出数が少なく、真の花粉化石組成を示さない可能性も高く、注意を要する。今後、周辺地域において同層準の分析を実施し花粉化石組成を比較検討する必要がある。

一方で草本花粉組成ばそのまま調査地点近辺の植生を示唆する可能性が高く、イネ科(40ミクロン以上)花粉の出現率が極めて高いこと、イネに由来するプラント・オパールも多く検出されることから、調査地点で稲作が行われていた可能性が極めて高い。また、ソバ属花粉も検出され、裏作や休耕田を利用してソバが栽培されていたことが明らかである。

## まとめ

今回の分析により、以下の事柄を推定した。

1) 中世から近世にかけての調査地点および米子平野西部の植生変遷を推定した。特筆すべき事柄は、以下のことである。

① 中世には、湊山にはアカマツ二次林が分布していたが、コナラ林を経てカシ林へと遷移していったと推定される。ただし、試料No. 1, 2では検出木本花粉化石の量が少ないことから、今後同時期の堆積物を対象に分析を継続する必要がある。

② 中世以降、調査地点では稲作が継続されていたことが明らかになった。しかし、「雑草」の検出量が多いことから、洪水などにより断続的に耕作地が放棄されていた可能性も指摘できる。

③ 中世以降、稲作の裏作あるいは休耕田の利用として、ソバ栽培あるいはアブラナ(ナタネ)栽培が行われていた可能性がある。

2) 試料No. 1, 2で、花粉化石検出量の少ない原因について考察した。

## 引用文献

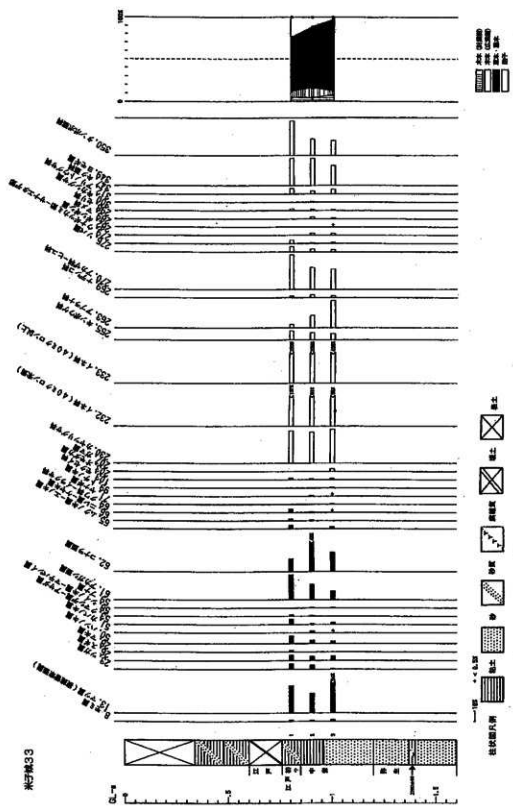
藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) 一数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一。考古学と自然科学, 9, P. 15-29.

藤田憲司・古谷正和・渡辺正巳(1991) 大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について。日本文化財科学会第8回大会研究発表要旨, 33-34.

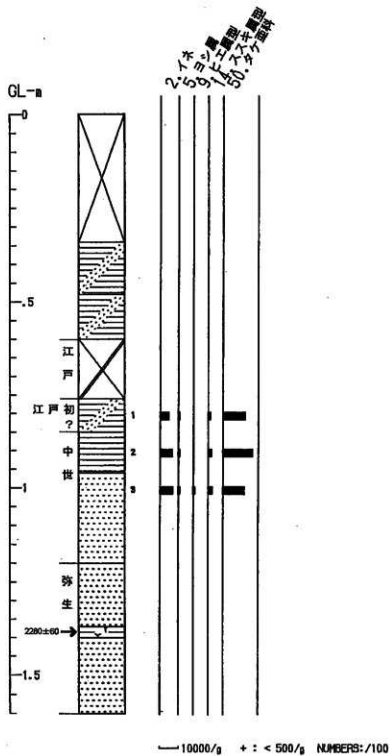
大西郁夫(1986) 米子市目久美遺跡の花粉分析。加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 68-77.

渡辺正巳(1995) 花粉分析法。考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社

渡辺正巳・中海・宍道湖自然史研究会(1988) 中海・宍道湖より得られる柱状試料の花粉分析。島根大学地質学研究報告, 7, 25-32.



第 23 図 花粉ダイヤグラム

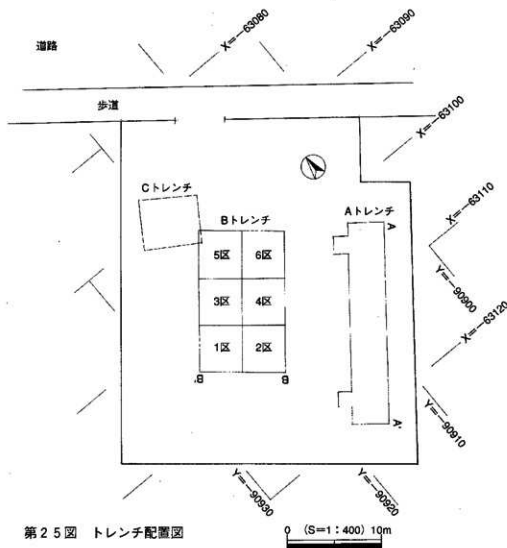


第24図 プラント・オパールダイアグラム

## 第4章 米子城跡第36次調査の概要

### 第1節 調査の方法

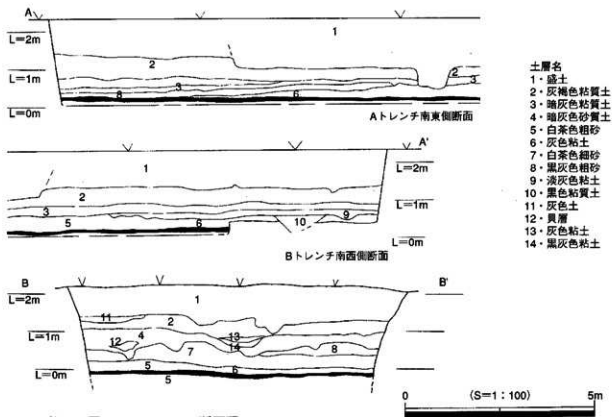
発掘調査は、重機にて調査区の表土を掘削した後、人力にて掘り下げ、順次、遺構検出、測量、写真撮影などの記録作業を行った。調査区は、3つのトレンチに分けて調査を行った。なおBトレンチでは、5メートルグリッド6区画を設定し、出土した遺物の取り上げは、グリッド単位で行った。また一部の遺物は、光波測距器を用いて平面座標値とレベルを記録して取り上げた。発掘作業は、排土置場の関係から、A、B、Cトレンチの順に調査を行った。調査では、弥生時代から現代まで、6つの遺構面を検出したほか、土器や陶磁器などの遺物をコンテナにして10箱分得ることができた。また、赤貝(サルボウ貝)の殻を廃棄した土坑を検出し、貝層の一部を持ち帰って洗浄、計測し、微細な遺物の発見にも努めた。



第25図 トレンチ配置図

## 第2節 調査地内の堆積（第26図）

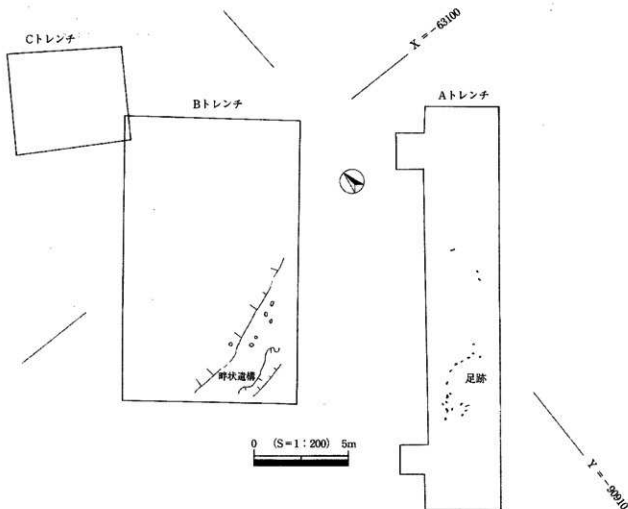
調査地点は、近年まで国鉄職員の官舎として利用されていた。現状では、雑草が繁茂する荒地の状況であったが、ほぼ全面がフラットな平坦地であり、北に位置する道路や、南側の住宅地よりは数十センチほど地盤が高くなっている。調査地点の堆積状況は、上層には明黄褐色の盛土（1層）があり、その下層から順に灰褐色粘質土（2層）、暗灰色砂質土（4層）、白茶色粗砂（5層）、灰色粘土（6層）、灰色粗砂が堆積している。暗灰色砂質土層（4層）は、部分的に色調や粒度に違いが見られ、特に暗灰色砂質土の下層では、クロスナに近い堆積も見られた。ただし、この暗灰色砂質土の検出面では、遺構を見つけることが難しく、結局この層を除去した粗砂層の上層で検出することとなった。また下層の灰色粘土層（6層）は、調査区のほぼ全面に水平に堆積しており、水田や、湿地などの安定期があったことを示している。粘土層の形成時期については、出土遺物がなく不明だが、上層の白茶色粗砂層（5層）中から弥生前期のものとみられる壺形土器（第42図—1）が出土していることから、弥生時代前期以降のものと考えられる。



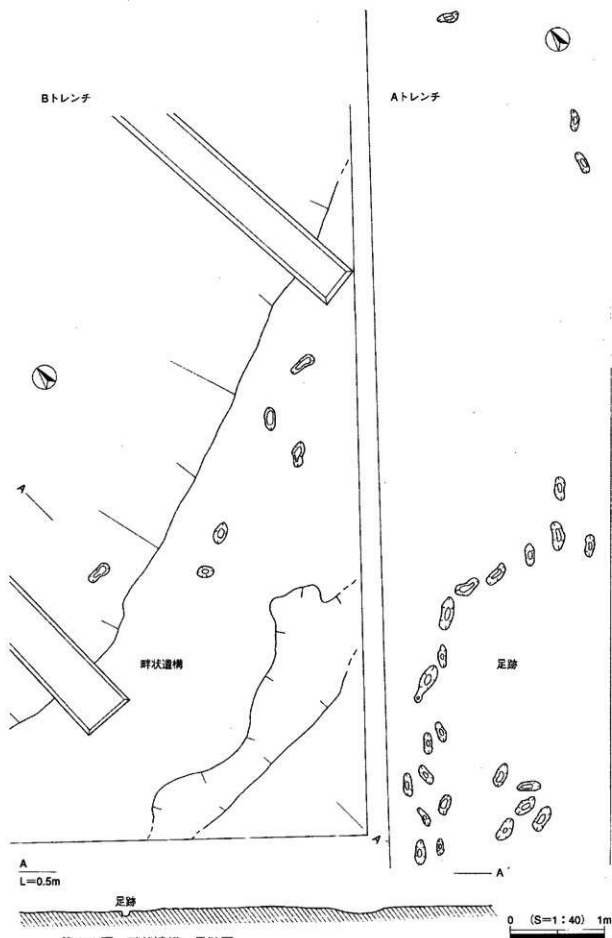
### 第3節 弥生時代の調査（第27図、第6遺構面）

表土から約2メートル掘削した地点、海拔標高0m付近の第5遺構面（白茶色粗砂）下層に、灰色の粘土が水平に堆積している状況を確認した。粘土の厚さは数センチから十センチ程度と薄く、出土遺物もほとんど見られなかったが、A、Bトレンチにおいて、足跡状の遺構と、畦状に色が変わった地点があったため、全面を調査した。

ここで検出した粘土の堆積層は、調査区の全面に分布しており、概ね南から北へ緩やかに傾斜している。Bトレンチの調査区南端と北端の比高差は約10cmである。粘土については、面的に堆積している状況から、水田遺構の可能性も指摘できるが、科学分析を実施していないため断定出来ない。こうした粘土の堆積層は、これまでの米子城跡の調査でも見つかっており、加茂川下流域に広く分布している状況が明らかになっている。年代については、まだ確定していないが、縄文時代晩期（3次調査）、弥生時代前期以降（21次調査）、などの年代が層位的に示されている。



第27図 第6遺構面遺構図



第28図 群状遺構、足跡図

## 足跡 (第28図)

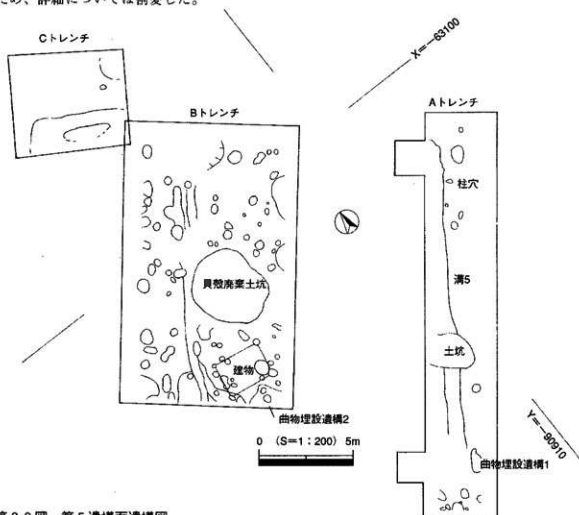
Aトレンチで25点、Bトレンチで6点検出した。全長は25～30cm、幅は10cm程度、深さは1～3cm程度と浅い。全ての足跡は、白茶色粗砂によって被覆されていた。調査には竹ペラとスプーンを用いたが、足指の痕跡まで残るものは見られなかった。また足跡の分布状況を見ると、歩行した方向を示す可能性もあるが、進行方向までは明らかに出来なかった。

## 畦状遺構 (第28図)

Bトレンチ南端で検出した、長さ8m以上で、幅約1.5m、高さ2cmの畦状の遺構である。土色の違いが平面的に認識できたことと、畦の南北でレベルの違いが認められたため、水田に伴う畦の可能性が高いものと考えた。ただし、耕作用具、収穫具の類が全く出土していないため、決め手に欠けることから畦状遺構の名称を用いた。

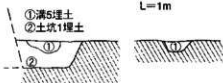
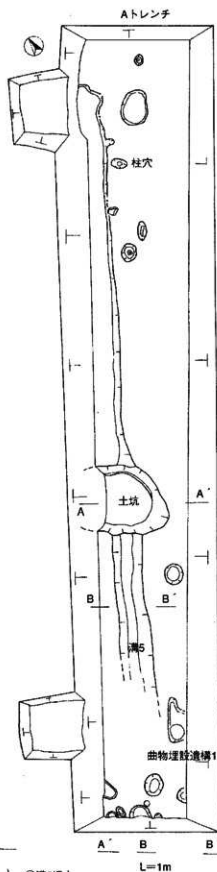
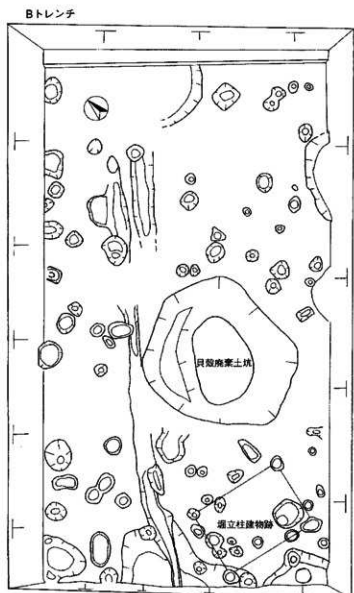
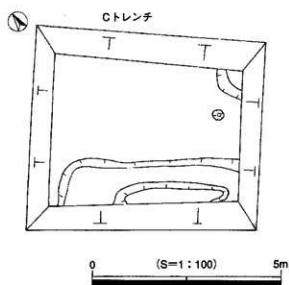
## 第4節 中世から近世前期の調査 (第29図、第5遺構面)

白茶色粗砂層の直上で検出した遺構群である。この中には、粗砂の面を覆う黒色粘土層から掘り込まれる遺構があるものと思われるが、それらを平面的に検出することが出来なかった。検出した主な遺構は、Aトレンチにおいて、溝5、根石を持つ柱穴、曲物埋設遺構、Bトレンチでは、建物跡、溝、曲物埋設遺構、貝殻廃棄土坑を検出した。他にも多数の遺構を検出したが、作られた時期や性格が不明であるため、詳細については割愛した。



第29図 第5遺構面遺構図





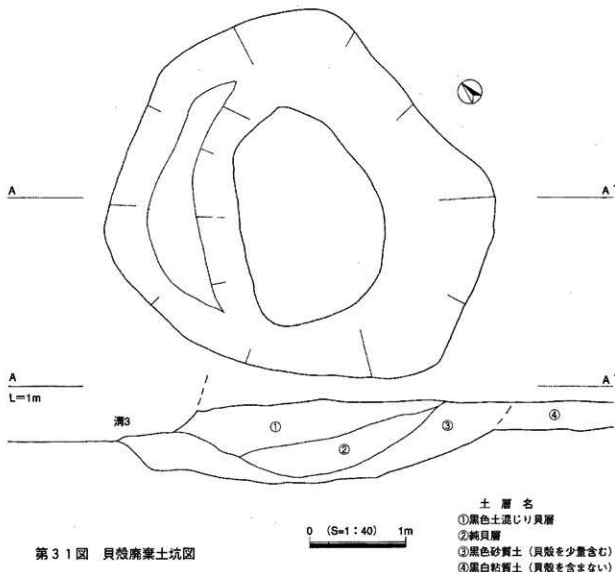
第30図 第5遺構面、溝5断面図

### 溝5・土坑1 (第30図)

Aトレンチで検出した。検出長16m、幅80cm、深さ30cmの溝である。また中央部では、性格不明の土坑1を切っている。土坑は、遺構の大半が調査区外に伸びるものと思われるが、直径2m程度の円形土坑と見られる。深さは70cmである。溝5から出土した遺物は、磁器碗底部、陶胎染付碗、陶器の土瓶、すり鉢の各小片が出土しており、18世紀後半以降に作られたものと考えられる。

### 貝殻廃棄土坑1 (第31図)

直径約4m程度の不整形な土坑である。掘り形は、すり鉢状を呈し、中央部の深さは80cmである。土坑内は赤貝(サルボウ)の殻で満たされており、3つの層に分かれる。貝層は、下層の第2層はほぼ純粋な貝層、上層の第1層は腐食土を含む貝層である。上下とも土嚢袋1杯分だけサンプルとして持ち帰り、洗浄、殻長の計測を行った。また魚骨の小片や鱗片も数点確認した。貝殻の計測結果は、全部で2286点の殻を確認した。この中には破損して長さの分からないものは含めていない。このうち赤貝は2259点、アサリは27点含まれていた。赤貝に関しても、全ての個体がサルボウであり、ハイガイは含まれ



第31図 貝殻廃棄土坑図

ていなかった。また上層と下層に分けて計測したが、下層には小形の貝が含まれるのに対して、上層は大形の貝が卓越していた(第44図)。こうした違いの生じる原因については、様々な理由が考えられるが、人為的な要因によるものか、自然的なものかは判断できなかった。また、ハイガイが含まれていないことは、中海においてハイガイが減少した時期を知る手がかりとなるため、今後も同様の遺構については、注意を払う必要がある。遺構内からは、須恵器甕片(第42図—18)、土師器土鍋(第43図—9)、土師器皿(第43図—15、19)が出土した。遺構の時期は、中世後半に相当するものと思われる。

### 掘立柱建物跡 (第32図)

Bトレンチ南側で検出した。1間×1間の掘立柱建物である。柱間の距離は、南北1.9m、東西2.6mである。柱穴内には、一部腐食した柱材が残っていた。建物の方位はほぼ南北を示す。建物の時期は、柱穴内から遺物が出土しなかったため不明であるが、第4遺構面で掘り方を検出できなかったことと、上層で検出した溝と方位がずれることから、中世から近世前期までの時期が想定できる。

### 柱穴 (第32図)

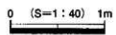
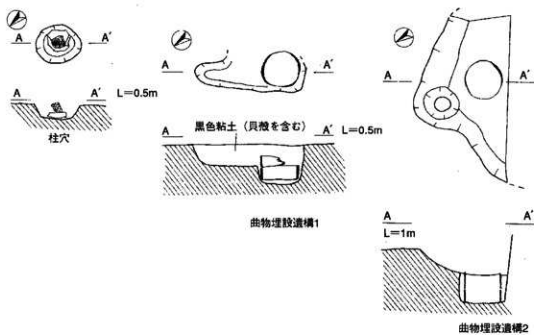
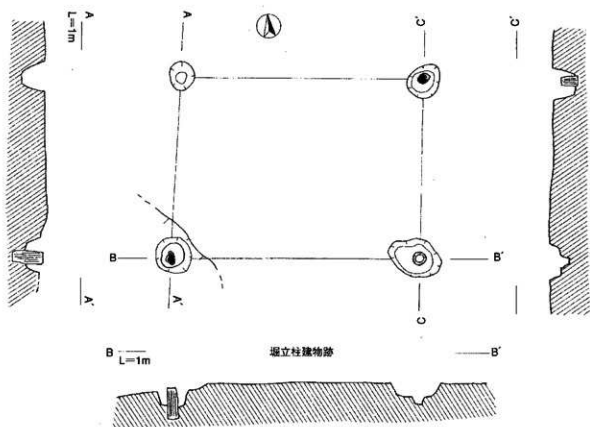
Aトレンチで1基検出した。直径50cmの円形土坑で、深さは15cmである。底には根石が置かれ、その上に柱材が残っていた。形態的な特徴から、建物に伴う柱穴と考えられる。時期は、遺構内から遺物が出土しなかったため不明である。

### 曲物埋設遺構1 (第32図)

Aトレンチで検出した。直径約40cm、高さ12cmの曲物を2段重ねた遺構である。一部は調査中の排水溝によって破壊されている。また遺構の上層には少量の赤貝の殻が含まれていた。遺構の性格については、土坑の底部から、かなりの湧水があったため、井戸枠として利用されていたものと考えられる。この遺構に伴う遺物は、瓦質鉢形土器(第43図—6)、土師器皿(第43図—13、14)が出土した。

### 曲物埋設遺構2 (第32図)

Bトレンチで検出した。直径約40cm、高さ15cmの曲物を2段重ねた遺構である。上層には赤貝の殻が多く含まれていた。曲物は、痕跡しか留めておらず、取り上げることが出なかった。また遺構の性格については、湧水が無かったため井戸としての機能があったかどうかは不明である。時期は遺構内から遺物が出土せず不明である。



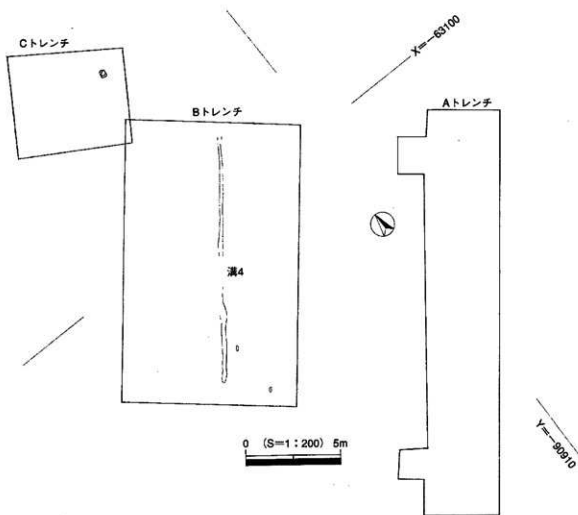
第32図 第5遺構面遺構図

### 第5節 近世後期の調査（第33図、第4遺構面）

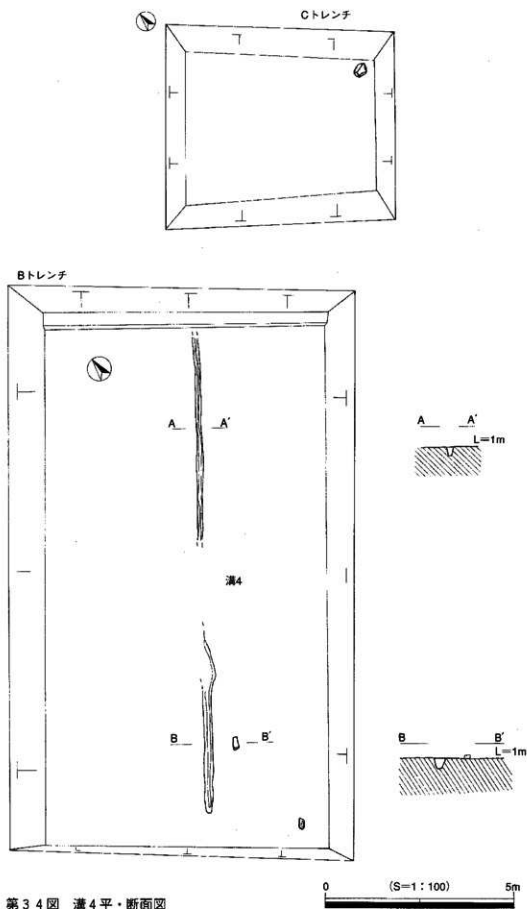
Bトレンチの第4遺構面から約10cm下層において、溝を検出した。

#### 溝4（第34図）

長さ12.5m、幅約20cm、深さ10cm程の溝である。中央部分は検出できなかったが、位置関係と方向性が一致する事から、同一の溝と考えた。この溝の用途については、形態的な特徴と、後世に作られた水路と同じ方向であることから、土地の境界を示す板界の痕跡ではないかと考えられる。出土遺物は、小片のため図化できなかったが、陶胎染付の碗やすり鉢などがある。遺構の時期は、出土した遺物から18世紀以降と考えられる。



第33図 第4遺構面遺構図



第34図 溝4平・断面図

## 第6節 近世末期から明治前期の調査(第35図、第3遺構面)

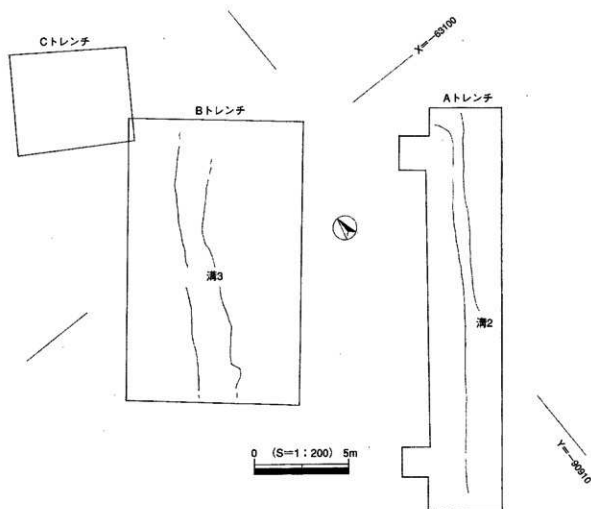
第3遺構面では、第2遺構面と同一のレベルで溝を2条検出した。

### 溝2(第36図)

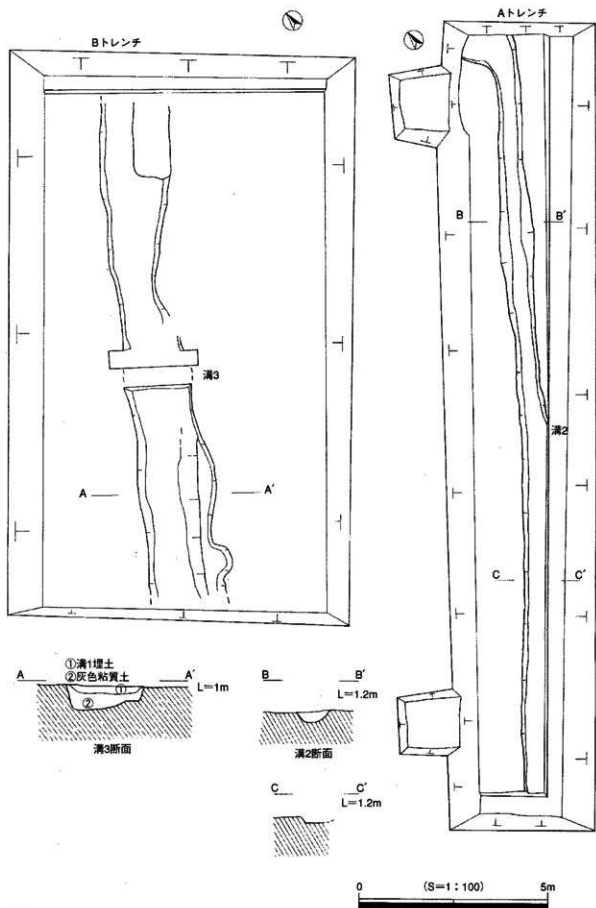
Aトレンチにおいて検出した。検出長20m、幅80cm、深さ30cmの溝である。遺物は、磁器の紅皿、段重壺(第41図-17、21)、陶器の皿、すり鉢、甕、(第42図-7、11、14)、土師器皿(第43図-12、25)が出土した。

### 溝3(第36図)

検出長13m、幅1~2m、深さ20cmの溝である。遺構の大半は、明治後期の溝1によって切られている。第2遺構面で検出した溝1と同様に畑や居住区などの区画を意識した溝と考えられる。遺物は、磁器の碗蓋、(第41図-20)、土師器皿(第43図-23)が出土した。この遺構面で検出した溝1、溝2は、出土遺物の年代から同時期に併存していたものと考えられる。



第35図 第3遺構面遺構図



第36図 溝2、3平・断面図



## 第7節 明治後期の調査（第37図、第2遺構面）

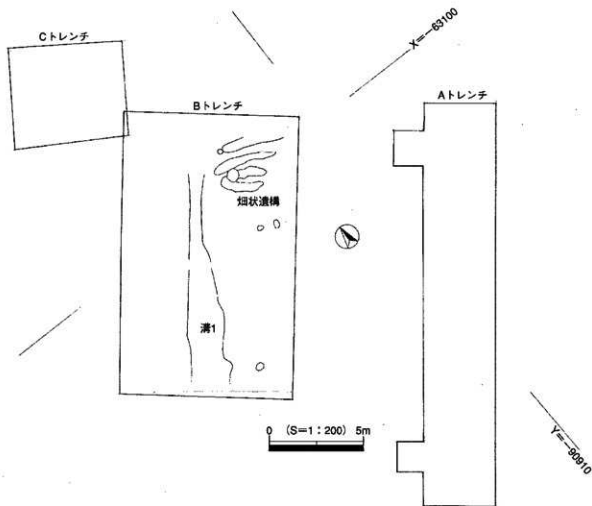
灰褐色粘質土上面で検出した遺構である。Bトレンチにおいて、溝、畑状遺構を検出した。明治時代に撮影された米子城下の写真には、水田や畑が各所に作られている状況が写し出されており、検出した遺構もこうした農耕活動によって形成されたものと考えられる。

### 溝1（第38図）

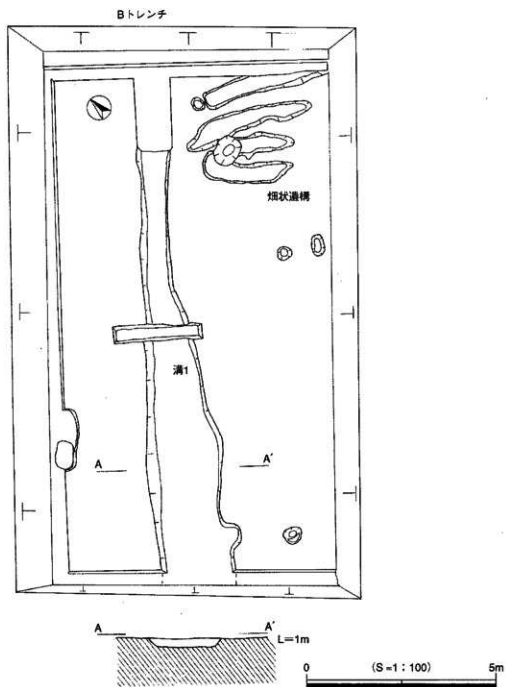
第3遺構面の溝3と同一のレベルで検出した。検出長9m、幅50cm～150cm、深さ10cmの溝である。溝3を切って作られている。また一部は上層の石垣によって破壊されている。遺物は、陶磁器片が少量出土した。

### 畑状遺構1（第38図）

Bトレンチの6区で検出した幅約50cm、深さ5cm程度の畑状の遺構である。形態的な特徴から畑の畝を作る際に掘られた溝と考えられる。この遺構が形成された時期は、明治後期以降と考えられる。



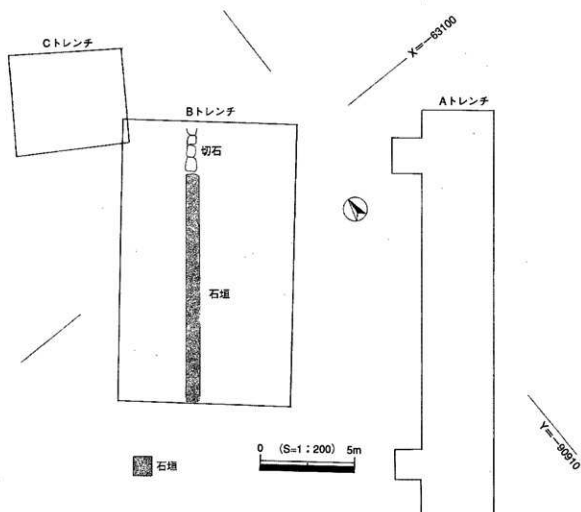
第37図 第2遺構面遺構図



第38図 Bトレンチ 溝1、平・断面図

### 第8節 明治後期以降の調査（第39図、第1遺構面）

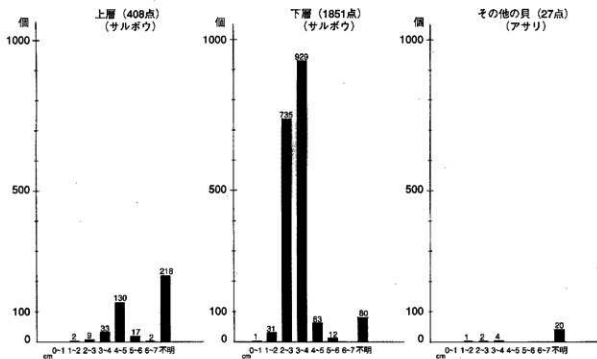
Bトレンチにおいて、石垣の下段部を長さ15mに渡って検出した。遺構の一部は、下層の溝1と重複しており、土地境界の線を踏襲して作られているものと考えられる。石材は、長方形に加工した荒島石と、産地不明の二等辺三角形の石材を用いている。なお、調査区北側の道路との境界に、これと同様の石材で石垣が作られているのが観察できる。現状では2段に積み重ねられているのが見られるが、これがここから抜き取られて新たに積み直されたものか、検出した石垣と同時代のものかは判別できなかった。大正期の絵図によると、畑から宅地へと地目が改められた痕跡があるため、検出した石垣は、大正10年代以降に宅地造成によって作られたものと考えられる。



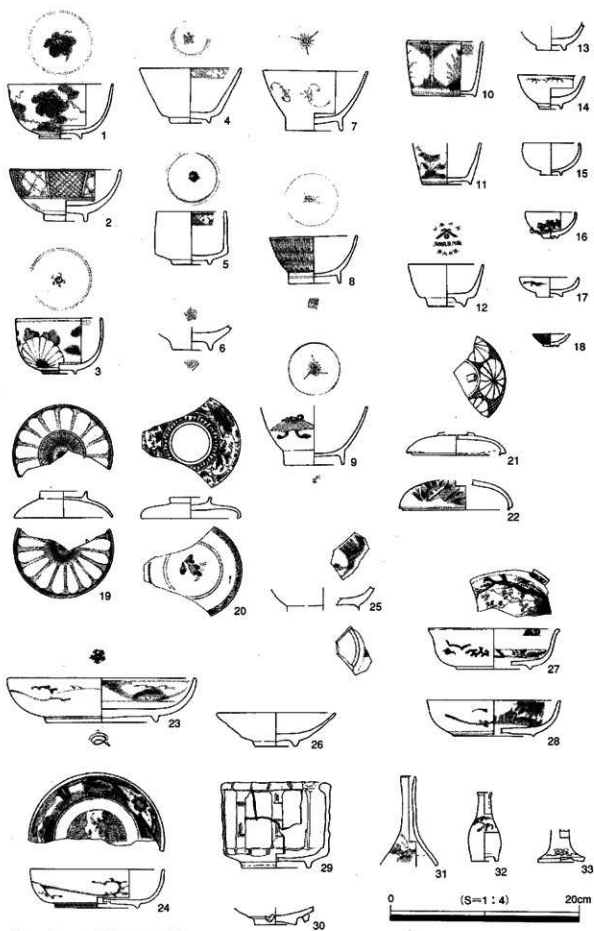
第39図 第1遺構面遺構図

## 第9節 出土遺物

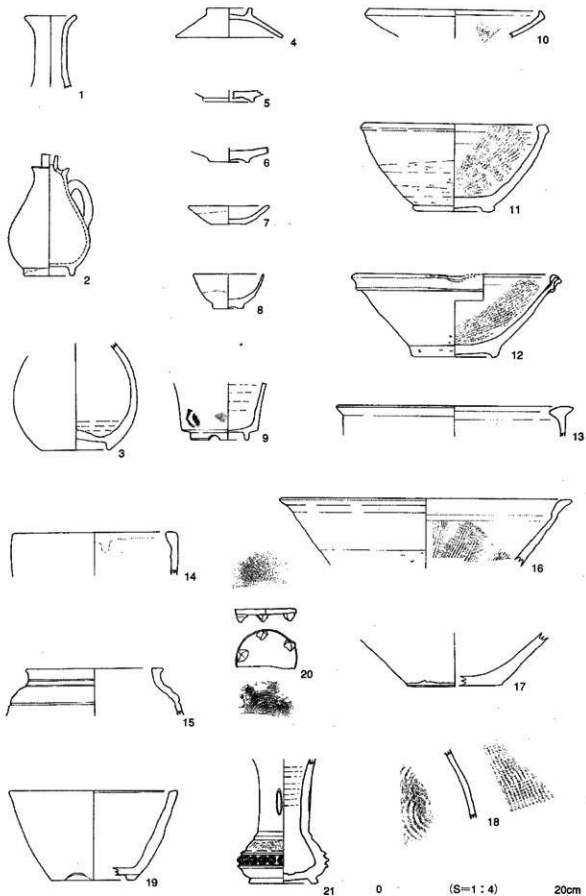
第40図の1～33は、磁器である。器種は、碗、猪口、小坏、紅皿、碗蓋、段重蓋、皿、香炉、瓶、仏飯器がある。第41図の1～21は陶器である。油瓶、卸皿、すり鉢、甕、椎木鉢などがある。17は、須恵質の鉢底部で、内面は使用の為平滑になっている。20は、両面を糸切りし、粘土塊を貼り付けた素焼きの陶器で、窯道具の「ハマ」と見られる。近隣の窯跡は、米子城内郭に明治38年から昭和20年代にかけて操業していた「米城焼(べいじょうやき)」があるが、これと直接的な関連があるかどうかは分からない。また21も素焼きの壺形土器で、2条の突帯と円形の珠紋を貼り付けている。また肩部には、蓮華紋を想起させる波状紋が巡る。第42図の1～30は、土器、土師器類である。1は弥生土器で、2、3は焙烙、4～6は鉢、7～9は土鍋、10は甕、11は火鉢、12～30は土師皿、灯明皿類である。第43図1は軒丸瓦、2～5は土人形、土鈴である。6は陶器片を加工したオハジキ、7、8はミニチュアの釜、碗で、8は磁器である。9は銅銭、10は扁平な円鏝で、一部に煤が付着している。灯明皿の灯芯押さえとして使用されていたものか。11は骨製品で円筒の一端に文様をはめ込む。用途は不明。12～14はガラス瓶である。12は青色を呈し、「あと染」の文字が浮彫りされている。15～36は土錘である。



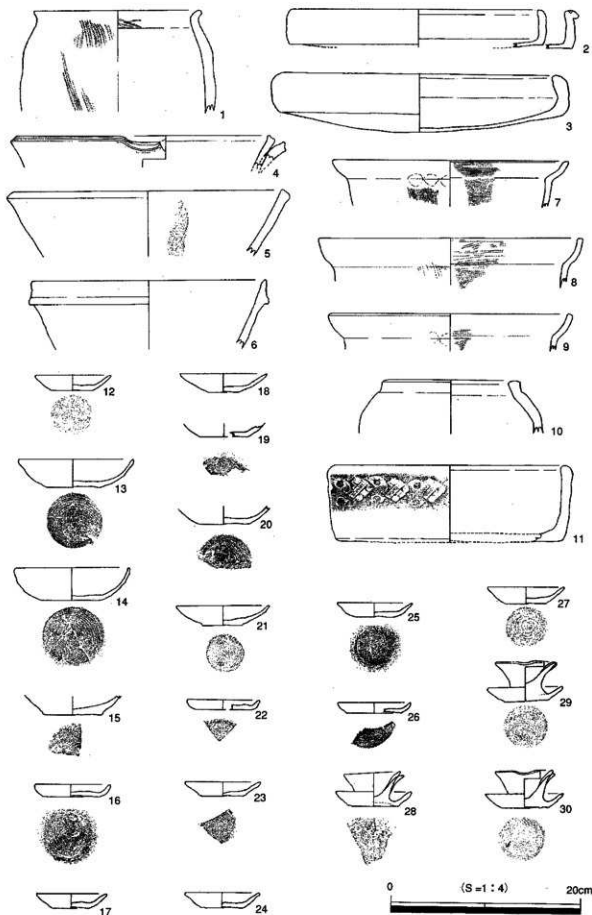
第40図 貝殻廃棄土坑出土土貝グラフ



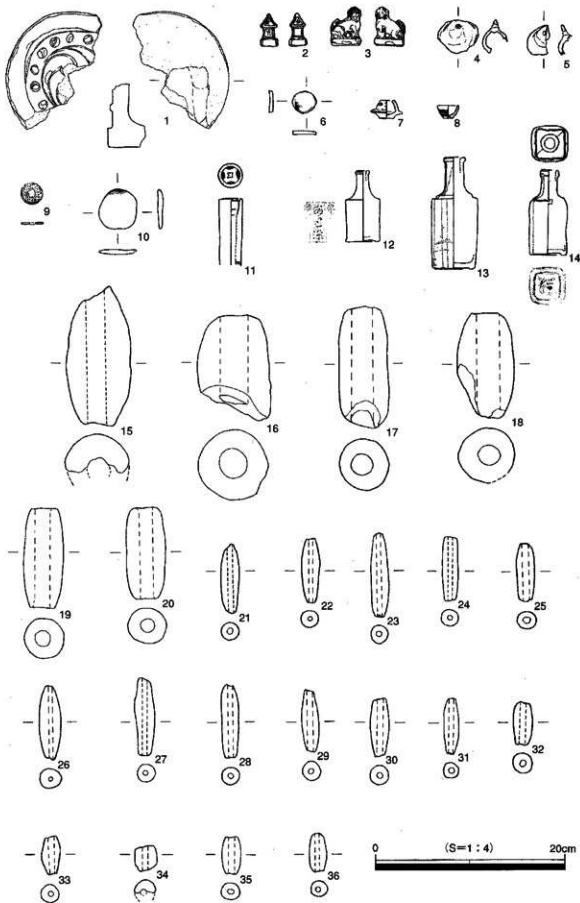
第41图 出土遗物实测图①



第42図 出土遺物実測図②



第43圖 出土遺物実測図③



第44图 出土遺物実測图④



## 第5章 まとめ

米子城跡33次調査では、初めて武家屋敷の内部構造を知る手がかりを得ることができた。江戸前期のものと思われる礎石建物と根石建物跡は、これまで不明であった近世米子城築城期の資料と考えられるものである。今回の調査範囲は、絵図に描かれている荒尾儀太夫屋敷の敷地、5分1程度の面積に過ぎないが、敷地の中央部に大形の礎石建物を建てて、その周囲に複数の掘立柱建物が配置されている状況が窺える。掘立柱建物についても、布掘のものや根石を持つものなど、複数の手法が用いられていることが判明し、今後の調査をする上での指標を得ることができた。

また、拡張区で検出した、明治時代後期に相当すると思われる遺物は、英国製靴磨き液の瓶やダニエル電池容器など、これまであまり注目されてこなかったものである。全国的に見ても数の少ない資料であり、米子地方のみならず、日本の近代史を研究する上でも欠かせない資料であると考えられる。紙幅の都合から遺物の詳細やそこから派生する問題などには全く触れられなかったが、雑多な生活用品の一つ一つが、近代化へと突き進む当時の世相を物語る資料となるだろう。

36次調査では、近世の遺構は、溝以外にほとんど確認することが出来なかった。江戸時代に描かれた絵図によると、調査区の南側には、五十人鉄砲町が所在しているが、調査した地点と見られる範囲には、建物などの施設が描かれていないことから、18世紀以降に描かれている絵図の内容とほぼ一致するものと思われる。恐らくこの地点は、畑などの生産域として利用されていたと考えられる。また米子城築城期の状況を窺わせる資料については、全体的に16～17世紀代の遺物が少ないことから、該期には積極的な土地利用は行われていなかったと考えられる。外堀に面した戦略上重要な地点と考えられるのだが、なぜ何も作られていないのか、更に検討を進める必要がある。また近世以前の状況については、只殻を廃棄した土坑や、掘立柱建物、曲物埋設遺構など興味深い資料を得ることができた。弥生時代と推定される粘土の堆積層の性格も含めて、今後の調査で解明すべき課題と考える。近世以前の状況については不明な部分が多いものの、調査地の北部一帯には縄紋時代後期以降に形成された古砂丘が展開しており、錦町第一遺跡（第2図-16）や、角盤町遺跡（第2図-17）、四日市町遺跡（第2図-18）など弥生時代から中世にかけての集落遺跡が分布している。今回の調査結果から、米子城跡の外堀よりもさらに北側に古代の遺跡が広がっている可能性が考えられるため、今後の開発行為については慎重に対応する必要があるだろう。



1・33次調査出土鬼瓦（第18図-1）



2・33次調査出土近代遺物



4.36次調査Bトレンチ貝殻廃棄土坑（北より）



3・33次調査出土ガラス製品



4-36次調査Bトレンチ畔状遺構（南より）

# 米子城跡 33 次調査

図版  
1



1・礎石建物1完掘（西より）



2・調査地より米子城を望む



4・江戸前期遺構面完掘（北より）



3・溝状遺構1完掘（西より）



5・掘立柱建物1（東より）



1・掘立柱建物1断面(北より)



5・掘立柱建物4(南より)



2・掘立柱建物2(西より)



6・礎石建物検出(西より)



3・掘立柱建物3(西より)



7・礎石建物2(南より)



4・掘立柱建物3(断面)



8・礎石建物1(西より)



1・礎石建物1 西側雨落溝 (南より)



5・井戸 (南より)



2・礎石建物1 南側雨落溝 (西より)



6・近代建物 (南より)



3・礎石建物1 南側雨落溝 (東より)



7・18 図-1、2 出土状況(南より)



4・石組遺構 (東より)



8・溝状遺構2 完掘 (南より)



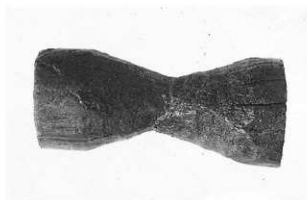
1・6 図-1



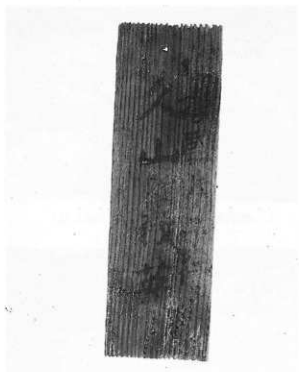
2・近代遺物



3・ガラス瓶



4・14- 図30



5・21- 図12



6・米子城下空中写真

# 米子城跡 36 次調査



1・B トレンチ南側断面 (北より)



5・A トレンチ第5遺構面完掘 (北より)



2・A トレンチ足跡検出状況 (東より)



6・B トレンチ第5遺構面検出 (北より)



3・B トレンチ畔状遺構検出 (南より)



7・B トレンチ第5遺構面完掘 (北より)



4・B トレンチ第6遺構面完掘 (北より)



8・C トレンチ第5遺構面完掘 (東より)



1・B トレンチ貝殻廃棄土坑検出 (南より)



5・B トレンチ溝4 完掘((北より)



2・B トレンチ貝殻廃棄土坑断面 (北より)



6・B トレンチ溝3 遺物出土状況 (北より)



3・A トレンチ曲物埋設遺構1 完掘(西より)



7・A トレンチ溝2 完掘 (北より)



4・B トレンチ曲物埋設遺構2 完掘 (北より)



8・C トレンチ第5 遺構面検出 (北より)





1・B トレンチ溝1完掘 (北より)



5・出土遺物 (磁器)



2・B トレンチ畑状遺構 (北より)



6・出土遺物 (陶器、土師器)



3・B トレンチ溝1検出 (北より)



7・出土遺物 (土師器、灯明具)



4・B トレンチ石垣検出 (北より)



8・出土遺物 (ガラス、土、骨角製品)

# 報告書抄録

ふりがな	よなごじょうせきだい33じ・36じちょうさ							
書名	米子城跡第33次・36次調査							
副書名								
巻次								
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	39							
編著者名	佐伯純也							
編集機関	(財)米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0822 鳥取県米子市中町20 (0859)22-7209							
発行年月日	2002年3月31日							
所在遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
米子城跡第33次調査	鳥取県米子市西町	31202	719	133度 19分 45秒	35度 25分 29秒	20010406 { 20010931	500㎡	集合住宅建設
米子城跡第36次調査	鳥取県米子市中町	31202	719	133度 19分 55秒	35度 25分 37秒	20020122 { 20020331	450㎡	集合住宅建設
所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
米子城跡第33次調査	城下町	弥生時代 中世、 近世、 近代	礎石建物 掘立柱建物 井戸 水路	弥生土器 土師器 須恵器 石器 陶磁器 木製品 金属製品 ガラス製品	武家屋敷の建物跡を確認、明治後期の一括資料			
米子城跡第36次調査	城下町	弥生時代 中世、 近世、 近代	溝状遺構、 掘立柱建物 土坑	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 金属製品 ガラス製品				